土の人長塚節

始

特231
582

土の人

橋田東聲 著

長塚節

東京 春陽堂 版

昭和十五年十二月
納本

自序

明治の文學者中、私は、長塚節がどうも好きである。好きといふよりも、おのづから、頭が下がる。節を崇敬し始めてから、久しくなるが、年と共に、尊敬の念は益深くなる。

歌會や講演會其他で、私が、節の人格乃至藝術について、自分の心持を語つたことは、おもふに、十數回にも上るであらう。雜誌や新聞にも、節について、屢書き、座談でも繰り返して、友人などに語つてをる。恐らく、私程節について語る人間は多くなからうと、ひそかに、考へてをる。それは皆、私の節を崇敬する心のあらはれであつて、今この「土の人長塚節」の出來るに至つた原因も亦同じく私の多年の節崇拜の餘瀝である。

何故に、私は、節をかくまで崇敬するのであるか。なぜ、節の藝術や人格にかくの如く共鳴するのであらう？　みづから考へて見る——

第一は、私が農村に生れ、農家に育つた爲に、同じやうに農村に生れ、農家に育ち、農村の藝術を成し、みづから農業をも營んだところの、節の人格乃至藝術に、心の底からの

共感を有ち得る爲である。節の藝術は徹頭徹尾土の藝術であつて、これは都會生活者には理解し難きものである。一通りは理解し得ても、その細密の部分は理解することが出來ぬ。それは農村に生れ、農業の經驗ある者でなくてはわからぬ。左樣の箇所が多いのである。勿論、節の家は豐かな地主であつて、あはれな小作人の家ではない。彼の鄕里は帝都を距るあまり遠からぬ下總國である。そこは、遠い土佐の僻村に生れた私とは著しく異る點である。けれども農村の生活や自然の景情や農民の心理は下總と土佐とに於て何等異なる所はない。節の描いた生活や自然にはさながらに、私の經て來た生活があり、又見て來た自然がある。この「世界の相似」が、私に限りなき節への共感を起させる。都會に生れ、ゆたかに育ち、毎朝電車で學校通ひをして、成人した幸福にしておめでたい世の紈袴子弟には、節の人格と藝術は理解出來ないのである。

第二に、節は自然の熱愛者である。彼れ位、自然を愛し、自然と遊び、自然と活きた藝術家は少ないであらう。まつたく、彼は自然兒（ナツール・チルド）である。私は自分の稟性上、人間よりも自然を好む。人事よりも天然が好きである。美術にしても、近代の裸體畫よりも蒼古な水墨の山水が好ましい。春の野、秋の山、それを思ふと、私は常に心恍惚となる。併し近代的な、美しい劇場や音樂會や舞踊や、左樣なものに心をひかれることは比較的に少ない。斯樣な私の性格ゆゑに、私は殆んど先天的に節の人と藝術とに共鳴するのである。

第三に、節の眞面目を私は好む。節は嚴肅な位、眞面目で、勤勉な人間である。几帳面で、眞劍な人間である。眞面目が好ましく、不眞面目が好ましからぬことは、何人にも共通の眞理に違ひないが、併し世には、遊ぶことのみの好きな、不眞面な人間も亦尠くない。遊ぶのも必ずしもわるいとはいへぬ。併し、私は不憫にして、遊ぶ心を解し得ぬあはれな人間に生れて來た。それゆゑ、遊ぶことのみを事としてゐるやうな人間が好きになれず、反對に節のやうな、眞面目な、几帳面な人間が好きである。遊ぶ心を知らぬものは、周圍のものには、つまらないであらう。氣の毒である。併しそれも宿命なればせんすべもない。

節は容易に他を容（ゆる）さなかつた。生活に於ても、藝術に於ても、少しの妥協をもゆるさない。自分に確乎たる信念があつて、それに合はぬものは斷然拒否した。他を容（ゆる）さぬ心は又みづからをも容さぬ心である。節は自ら持することも實に謹嚴であつた。從つて好い加減

なこと、不眞面目なことは、彼には決して出來なかつた。自分に出來ないのみならず、左様の者を見る時は、彼は容赦なく、責め叱つた。彼の周圍の者で、彼に叱られなかつたものは少ないのであらう。時には叱責が强きに過ぎた。私のやうな、弱氣の者には特にも强よ過ぎて、苦しいが、併しこれも一に、節の「正しい心」から來てゐるのである。

寫生の主張には、節は實に熱心であつた。ひそかに思ふに、彼の百姓生活は、自然を寫生するための彼の念願からであつたらう。炭竈を築いて炭燒きをしたのも、竹林をつくつて自分で竹を植ゑたのも、皆彼が自然の生活を體驗(エルレーベン)せんための手段であつたといへる。歌も、寫生文も、小說も、すべて寫生の上に樹つてゐる。小說を書くために、村の若者に扮して、夜遊びに行つたなどといふ小話も亦寫生の心持から首肯かれる。監獄の中を描寫せんとして、看守を忘頼したことも有つたさうである。彼には自ら體驗せぬことは一行と雖も書かれなかつた。一首と雖も詠めなかつた。

若し夫れ、彼の藝術に至つては、特にも、その短歌に至つては、唯だ唯だ頭を垂れて、尊敬すべきものである。又「土」の如き作品が世に多く出でやうとは思はれない。併し之等の批評や解說はおのづからこの「土の人長塚節」の內容をなすものであるから玆にはわざと言及しない。

節の藝術と農村問題とを結びつけて云々するのは、偶私が農村に生れ、經濟學を修め、農業政策に興味と多少の研究を有してゐる所から、農村對策の藝術的方面を考察するための一つのあらはれに過ぎない。併し節の研究はこの方面にも深い示唆のあることを世の農業政策に志ある人々に告げたい。

兎に角、私は長塚節といふ人格を斯樣な理由から尊敬してゐる。その結果、この「土の人長塚節」の一書が生れたのである。節が或る時、何かの機會で福島市の或る紡績工場を參觀したことがあつた。そこには固より多くの女工達が働いてゐた。節は浴衣がけか何か無雜作な服裝でそこを一巡したが、後で女工達は節のことを實に「氣高い人」であると噂さし合つたさうである。これは生前節と親交あつた人の直話であるから間違ひはない。無智な女工達の眼にさへ、節は、氣高い人として映じたのである。節に就いては書くべきことは未だいくらもある。が、書物にはページの制限もあつて、私は今この書に書いた內容

だけに止める。近來節の人と藝術への追慕讃仰は頓に高くこれから、節の研究もだん〳〵多くなり、立派な文獻の現はれることを期して疑はない。私のこの書はその下積みの石の一つである。

この書を印刷に廻してから、私は急に奥羽北陸から九州の旅に上つた。この大村の岳父の家に來てから、全部の校正を了へることになつたのである。大村の滯在中、數日を長崎に過ごしたが、其間、一夕、子規と節の藝術について、一條の講演を試みた。意外に多くの聽衆のあつたことは、自分のひそかに喜びとする所であつた。これ迄も節については度度講演した。その講演を聽いてくれた人が、何かの機會に、もし本書を讀んで下さるならば、おのづから、新たなる思ひ出もあらうと信ずるのである。

橋田東聲記す

土の人長塚節

目次

一　長塚節略傳……一
二　短歌、自然及農村……八
一　人間の生活と自然……九
二　藝術の素材としての自然……一〇
三　自然に陳腐なし……一三
四　自然を見る眼……一四
五　農村の藝術……一五
三　全人格の藝術……一七
一　節への傾到……一七
二　村の樸林……一八

三　安倍能成氏の「土」評……一〇
四　體驗の生む技巧……一三
五　全人格の藝術……一五
四　子規と節……一七
一　子規といふ尊い光……一八
二　入門……二〇
三　竹の里人を訪ひて十首……二一
四　左千夫の語「理想的愛子」……二七
五　子規の訃報……二一
六　酷似せる師弟の運命……二五
五　左千夫と節……二六
一　同年同門に入る……二七
二　子規歿後の根岸派……二九

三　寫生と主觀との論爭……五一
四　島木赤彦氏の評言……六二
六　自然の人長塚節……六四
一　自然との交靈……六四
二　早春の歌……六五
三　晩春の歌及「土」の自然描寫……六八
四　炭燒くひまの歌……七二
五　動植物の觀察……七五
六　初秋の歌及晩秋雜詠……八〇
七　乘鞍岳を憶ふ歌……八七
七　節の旅の歌……九一
一　日向遊行歌……九二
二　羈旅雜詠（中仙道近畿旅行）……一〇三

三　榛名越え……一一三
八　一つの旅信……一一八
一　芭蕉の奥の細道……一一八
二　上州花敷温泉より……一二一
三　旅する心……一二四
九　病氣と作品……一二五
一　喉頭結核……一二六
二　病中雜詠其二……一三〇
三　藝術家と病氣……一三七
一〇　鍼の如く抄……一三九
一　解　題……一四〇
二　歸省中の歌……一四三
三　母をうたへる……一四六

四　病院生活（一）……一四九
五　病院生活（二）……一五五
六　病院通ひ……一六一
一一　細心と眞面目……一六五
一　門間春雄氏の談話……一六六
二　中岫つや子さんへの手紙……一六九
三　藝術としての歌でなくてはゆるせないのです……一七四
四　母堂を叱る……一七八
一二　節と女性……一八一
一　一生獨身……一八二
二　或る女……一八三
三　赤彦氏の追悼語から……一八五
四　幽思孤情……一八六

五　節の相聞……一八九
六　横瀬夜雨氏の言葉……一九五
一三　死の前後……一九八
一　死の床へ……一九九
二　臨　終……二〇一
三　漱石、子規、節――三つの死……二〇四
四　遺　骨……二〇七
五　平福百穂氏の哀悼歌……二〇八
一四　村の指導者……二一三
一　『眞面目で骨折る』……二一四
二　母堂への手紙……二一六
三　徳、青年を感化す……二二〇
四　岡田村青年會長……二二六

五　農村指導……二二七
一五　「土」と農村問題……二二八
一　鄕土藝術としての「土」の價値……二二九
二　夏目漱石氏の讃辭……二二九
三　春の田園……二三一
四　盆　踊　り……二三五
五　血で描いた小説……二四一
六　「土」と農村問題……二四四

平福百穂氏裝幀

一　長塚節略傳

長塚節（たかし）は明治十二年四月三日を以て、茨城縣下總國結城郡岡田村國生（こうしやう）に生れ、大正四年十二月八日、喉頭結核の痼疾のために九州大學病院の一室で亡くなつた。享年三十七歳であつた。

家は村の相當な地主で、多くの使用人を置き、ゆたかに暮してゐた。父が縣會議員なぞ政治の方面に入つてゐたので、家の事は多くは母の指揮の下にあつた。節は長男である。次の弟は順次郎氏といひ、工學士で小布施姓を冒してゐたが、この頃は長塚氏にかへつてゐる由である。その弟は整四郎といひ、軍人で、日露戰爭には出征もしたが、先頃亡くな

つたと聞いた。妹さんが二人あつて、一人は足利市に嫁いでゐる。

明治二十六年、節は十五歳にして小學校を卒業し、水戸の中學に入つたが、在學三年にして病氣の爲、退學した。三歳にして百人一首を暗誦したといふから、記憶力はつよく、學業の成績もよかつたが、腦神經衰弱のために學業を續くること能はず、退學して鹽原に轉地することとなつたのである。この頃から、歌は作つたらしい。正岡子規が晩年に至つてはじめて歌に手をつけたとは異なり、節は頗早くから歌をやつたのである。

明治三十一年、子規は短歌の革新運動を起し、新聞「日本」に堂々の論陣を張つた。「歌よみに與ふる書」(十回に及ぶ)「人々に答ふ」「百中十首」など、今尚愛讀されてゐる子規の歌論歌話はその時の論文である。節は當時未だ二十歳の青年であつたが、ふとした事から子規の名を知り、子規の文を愛讀するやうになつた。後、自ら記して曰く、

「歌よみに與ふる書」といふのは十回にわたつたのであつたが、自分にはいかにも愉快でならないので、丁寧に切り抜いて置いて頻りに人にも見せびらかした……百中十首が出ると初めは變なものだ、と思つたが段々面白く感じて來てたうたう眞似て見るやうになつた……。

一年おいて三十三年三月二十八日節は遂に上京し、根岸の子規庵を叩いて入門したのである。三月三十日二度目に子規を訪ふた時、題を與へられ、苦吟して漸く席上十首を得、これが「日本」に掲載せられた。それから毎年數回上京し時には一と月餘も滯在してその間隔日位に子規を訪ひ、教をうけたのである。後年の大成はこの時に胚胎するのである。齋藤茂吉氏が子規といふ光を慕うて寄つて來た因緣が尊いのであるといつたのは、面白い言葉である。根岸庵歌會がその頃はじまり伊藤左千夫、岡麓、香取秀眞、赤木格堂諸氏が集つた。節も自然この人々と相識るやうになつたのである。この根岸歌會のあつまりが、現在のアラ、ギの原流であつて、世人が子規一派のことを根岸派といふのは、こゝに原因してゐる。子規の家が當時下谷の根岸町にあつた爲である。節がはじめて子規を訪ふて、その教をうけたのが彼が二十二の歳である。

然るに子規は三十五年九月十九日を以て遂にその居に逝いた。節が師として仰ぎ仕へたのはわづかに二年半に過ぎない。併し子規は非常に節を愛し、節は又深い尊敬を以て子規

を仰いでゐた。それは後章「子規と節」に於て詳しく説明する。

二

明治三十六年、節が二十五の時に根岸短歌會から「馬酔木」といふ雜誌が生れ、節も前記の人々と共に編輯員の一人となつた。竹の里人選歌が根岸短歌會から出たのは翌年のことである。節の歌文はそれからすべて、馬酔木によつて發表せられた。

節は又三十八年、房州に旅行し、清澄山で炭燒を見て一週間を送つたが、この頃から木炭の改良を志し、庭前に炭竈を築き、自ら改良炭燒きを試みてゐたが、三十九年七月になつて、寫生文「炭燒の娘」が青果の名で馬酔木三週年紀念號に發表せられた。この年から諸國を旅することが漸く多くなつた。

四十一年は彼が三十歳の年であるが、その前年あたりから彼の文章及び歌は全く圓熟して來た。四十一年は「馬酔木」が廢刊せられて、新に「アカネ」の出た年である。その創刊號に節は晩秋雜詠を發表し、又後、ホトヽギスに「芋掘り」といふ寫生文を載せた。これは彼の作品中注意すべきものである。暮春の歌が次いでアカネに表はれた。旅行はやはり續けられた。

その時分俳句雜誌ホトヽギスは編輯法がかはつて、小説を多く載せた。虚子も小説家として名が高くなつた。定連ともいふべき人は左千夫、節等根岸派の人々並に漱石門の赤門派の人々であつた。即ち赤門の新進としては三重吉、草平、白川、苓三、健作、樂堂といふやうな名が多く見えた。阿部次郎、安倍能成、小宮豐隆、宮本和吉諸氏が文藝評論の筆を執つた。私は恰も大學に入つたばかりの頃であつたが、當時のホトヽギスは文壇の中流に棹してゐたものである。編輯はたしか島田青峯氏であつた。

節は四十二年に「開業醫」「教師」四十三年に「隣室の客」「太十と其の犬」を發表してゐるのである。何れもホトヽギスである。而して「土」がはじめて東京朝日新聞に連載せられ初めたのも四十三年のことである。尙この年には傑作「鍾馗岳を憶ふ」をアラヽギに發表した。アラヽギがはじめて發行せられたのはたしか明治四十一年で、上總の蕨眞氏の所から出たものである。その第四號から東京に移つて、東京本所の伊藤左千夫氏宅を發行

所とした。

三

節は四十四年の夏頃から咽喉に痛みを覺えたが、上京して岡田和一郎博士の診斷をうけると、喉頭結核と宣告せられ、根岸の養生院に入院したが、この病氣が遂に彼の命を奪つたのである。大正元年二月のアラヽギに「わが病」を發表してゐる。

喉頭結核と診斷せられてから、節もさすがに驚いたのであらう。その翌年京都に行つて大學病院に入院し、(「病中雜詠」の作あり)又福岡へ行つて久保猪之吉博士の診察をうけた。九州を旅行したり、京都奈良に遊んで古美術を見て歩いたり、國へ歸つたり、すぐ又上京して岡田式靜座法を初めたり、ずゐぶんと色々活動し、又療養に骨を折つてゐる。

大正二年には再び福岡に行き、久保博士の診療をうけたが、すぐに又中國京阪を經、伯耆出雲に遊びなどしてゐる。歸省、又上京、神尾氏の金澤病院に入院する。この年伊藤左千夫氏が死んだ。

大正三年、金澤病院から、神田の橋田病院に轉じたが五月退院し、一先づ歸省の上、更に六月出發して福岡に赴き、大學病院に入院した。この頃から病氣漸く重く、久保博士其他の親切なる診療をうけたが、遂に効なく、翌大正四年二月、三十七歳を以て九州大學の病院に逝いたのである。甚だ短い生涯であつたといはねばならぬ。

二　短歌・自然及び農村

一

吾々人間は自然のうちに活き、自然の上に活きてゐる。自然は吾々に生活の資料を供給してくれる。自然の資料なくして、吾々は一日と雖も生命を保つことが出來ぬ。これは經濟學の方面である。が、これと同時に又、自然は吾々に向つて精神の糧を供給してくれる。

自然が人間に供給する精神の糧とは、卽ち藝術制作の「素材としての自然」である。これは藝術の分野である。

自然が藝術の素材として人間に寄與することのいかに、多きかは、例へば繪畫を見ればいつも山か水か、花鳥風月の類である。人物動物を描いても必ず「自然」が配合されてゐる。これは昔から繰り返されて來た。今後も永久に繰り返される事であらう。昔から今に今から永久に同じ題材が繰返されて繪畫の對象と爲るといふことは、卽ち繪が主として、「自然」に依據する藝術であることを反證するものに外ならぬ。實際繪畫は、とくにも日本の繪畫は自然に依る藝術である。畫家の制作對象から自然を禁止するならば、多くの畫家は忽ち干上るに違ひない。

一目瞭然である。毎年秋になると、東京には澤山の繪畫展覽會が開かれ、吾々もそれを觀る爲に一日を費して出掛けるのであるが、會場に入つて驚くことは、山水草花の類の寫生畫が毎年同じ人によつて同じ樣に、繰り返し繰り返し出陳されてゐることである。描く所

南畫の如きは特に自然を對象とする藝術である。これは山水を描くのが主目的であつて、人物の如きは措いて顧みない。稀に描いてもほんの點景に過ぎぬ。西洋の藝術には自然よりも人物特に肉體描寫を目的とするものもあるが、これは民族性の相違である。我國の藝術は東洋藝術並思想の流れを汲んで、いたく自然的であり叙景的である。

二

繪畫ばかりではない。小說詩歌に於ても、自然は又最大の貢獻者である。これは多く說明を要せぬ事柄である。古來旅行の文學が自然を主として取扱つてゐるのは固よりその所であつて、私が更めて說くまでもない。

詩歌の中で、最も自然に依ること多きものは俳句であらう。俳句は、全く、自然を對象とし、自然に生きる藝術である。「季題」とはこれより生ずる約束である。俳句から自然を取り去れば殆んど殘る所はない。長詩には主とし自然を對象とするものと、人事を對象とするものとの別がある。叙景詩といひ、抒情詩といふ。歌はむしろ人間感情の表現にして自然の表現たる俳句と對立して考へられる。昔から歌に相聞或は戀歌といふ一類のあるのはこの爲である。中世の堂上歌人は歌といへば皆戀歌の如くに考へてゐたらしくも見える。偶自然をうたへば千篇一律に技巧的な花鳥風月歌に過ぎなかつた。

併し乍ら、本質上主情的なる短歌に於ても「自然」は又大なる役目をもつてゐる。特に萬葉調を主流とする現代の歌壇にありては、自然の詠出は著しく多く、名歌といひ、大家といへば、それは多くは叙景歌であり、叙景歌人である。こゝに抒情主義を唱へて現歌壇の俳化を罵る論者があらはれ、實生活を吟詠の內容とすべきことを力說して、現代歌壇の月並花鳥風月歌を憤る論者も出で來る。皆夫々理由のあることには違ひない。現歌壇に著しく叙景歌が多くなり、寫生の手法の流行せることは事實であらう。而して、それは短歌の本質から見れば正にいびつなる發達であるといはねばならぬ。

三

この傾向に就いての評論は今はやめる。唯だ併しこの傾向を馴致せる原因をアラヽギの勢力や、寫生の偏重といふが如き寧ろ外面的なる事情に求めずして、歌の內容に必ず自然を對象とすべき必然性のあることを考察の中に入れて置きたい。これは頗重要なる事項である。抒情詩とはいひ乍ら、歌もその半を占むる領域に於てはやはり自然の諷詠を以てその使命とするものである。昔赤人の見た富士は今牧水の見る富士である。千年を隔てゝ赤

人もうたひ牧水もうたふ。そこに何等の支障もない。又それが藝術上不可なる理由は少しもない。私は「自然」は短歌に於ても亦缺くべからざる要素であることを信じ、花鳥風月を歌ふことも、實感に根ざす限り、亦立派なる製作態度であつて、何等不都合なきことを信ずる。草木の生長凋落、小鳥の囀り、山川のすがた！　それに古るき新しきの區別のある筈がない。素材として永久性をもつ。風月の吟詠を陳腐なりといふは、その人の態度の陳腐なるが爲にして、風月そのものに陳腐は有り能はぬ。

所謂生活派の人々の歌を見るに、直接に人生を歌ひ生活をうたふと稱し乍らも猶且自然をうたへるものが少くない。少くとも配合としての自然は作中隨所に散見する。これも短歌に自然の素材の必要缺くべからざる所以を裏書するものである。石川啄木の歌にも西村陽吉の歌にも山水もあれば花鳥もある。全然之等を無視することは生活派の人々と雖も困難である。唯だ月並に花鳥風月を歌ふのが製作として不可なるのみ。之を活かせば花鳥も風月も常に新しい。吾々は月並の題材の花鳥の中に新しい生命を發見すべきである。そこに作者の腕が要る。花鳥そのものが陳腐になるのではない。作者の心に懈怠が來るのである。

かくて美術といはず文學といはず自然の貢献するところは、實に廣くして大である。とくにも、我國の文學美術は自然に依據することが大である。私が上に、自然は吾々人間に精神の糧を供給するといつたのはこゝの事である。自然の惠みの偉大なるゆゑんを吾々は決して忘却することは出來ない。

四

短歌と自然との關係が右の如しとすれば、短歌の本道が抒情的であるに拘らず、その外に立派に叙景歌の分野のあり得ることは言を俟たない。又人麿赤人の萬葉時代より今日の歌壇に至るまで叙景に秀れたる人並に作品の少くない理も明白である。

さて自然の純なるものは都會よりも農村に多く、文化の進歩せる地よりも然らざる地に多い。都會の自然はすでに人爲に汚され、曲げられてをるけれども農村の自然は自然そのまゝの姿にある。然らばこの村に純粹なる自然詩人が生れ、自然の詩歌が生まるべきこと

は固よりその所といはねばならぬ。長塚節の歌はこの意味に於て最も注目すべき田園詩である。正に郷土詩又は農民藝術の名に値ひするものである。その内容に於て、技巧に於て制作の態度に於て節こそはわが日本文學の生みたる眞個の田園詩人である。

「土」が郷土藝術として尊重さるゝ所以はその自然描寫の尅明にある。これは後にいふであらう。季節の推移、草木の榮落、氣象の變化、それは實に細密に周到に描かれ、一木一草と雖もこれを仔細に點檢し、生彩ある技巧を以て一々に描寫してゐる。これは彼の百姓生活の體驗から來てゐる。季節の變化より起る人の感情は古來俳人によりて研究せられ所謂「季題」の如き特別の約束さへ生じたのであるが、節は歌人にしてこの季題をよく研究しよく會得してをる。これは歌の歴史に於て特筆するの價値がある。（馬酔木第十二號歌の季に就いて參照）試みに彼の自然を見る眼の鋭さを證すべき歌を一二引用しよう。

白埴の瓶にさやけき水吸ひて桔梗の花はひきしまり見ゆ

麥刈ればうね間うね間に打ちならび菽（まめ）は生ひたり皆かゞなりて

芋殼を壁に吊せば秋の日のかげり又さしこまやかに射す

第一の歌では「ひきしまりみゆ」が桔梗を活かしてをり、第二の歌では「皆かゞまりて」の結句にいふべからざる味と深さがある。第三の芋殼の歌にしても寫生が直ちに寫意に入つてをる。其他一々例示に勝へない程多い。斯樣な嚴密な寫生は象徴の名に價ひする。この意味に於て節は田園の象徴派である。これは眞に土を生き、草木を生きた人でなければ到り得ぬ境地である。

麥の蒔遲れは致し方無之候へ共、但だ本年は暖氣なりし故など申され候ては、私には涙の出る程情なく感ぜられ申候。百姓する者が何故にかく年々のことが解らぬものに候や。

これは後にもいふ如く、節の死の前年（大正三年）に福岡の病院から郷里の母に送つた手紙の一節である。麥の蒔遲れを聞いて涙を流して口悔しがり、はては、百姓する者が、何故に、かく年々のことが解らぬにや、と母を責めてをる。涙の出る程情ないとは節が麥の

蒔遲れを歎く心情である。金錢に見積れば大した額ではない。又節の家は豐かに生活してをる。彼の悔いはそこにあるのではない。たゞ、百姓するものが、麥蒔を等閑にしたることが口惜しいのである。これは眞に「土」を愛する者の心に於てでなければ起らない感情である。

節は眞に自然を愛し、自然に抱かれた。自然のうちに自己の生命を發見した。彼れ位自然に忠實であつた藝術家は日本の文學史にはその例がない。自然兒（ナツールキンド）といふ言葉がある。節の如きがその名に最も適當する人であらうと思はれる。

彼は全く土を生きてをる！　自然に驚歎し、又これに冥合してをる。

芭蕉、西行、良寛、皆風月山川の侶である。自然兒である。併し、節の如くに土臭いところがない。生活の回避者の心事が見える。消極的の獨善主義の如くである。然るに節はみづから進んで、農民の中にはいつてをる。そこが、私には、なつかしくも有難いのである。

尙、節の徹底的自然兒なりしゆゑんは後章「自然の人長塚節」を參照せられよ。

三　全人格の藝術

一

私はすでに年久しく長塚節に傾倒してゐるが、この傾倒は年と共に益深くなる。併し私は生前遂に一度も氏に會ふことが出來なかつた。會ふ機會は幾度もあつたが、いつも逸してしまつたのである。併し作品を通しての節には多年會つて居る。會つて唯だ唯だ崇敬してゐるのである。

節が福岡の大學病院で遂に起たなかつたといふ報知を最も早く受け取つた者の一人は私である。それは私がその頃（大正四年）東京日々新聞の編輯局に勤めてゐたので、地方通信によつて早く知り得たのである。通信は短いものであつたが、深夜の編輯局にひとり居殘

つて、原稿に朱筆を加へてゐたその時の私には、實に、驚愕すべき通信であつた。私は驚きのあまり、心氣俄かに昂ぶつて、何んとも仕樣のない一と時を薄暗い夜の室に送つた。記事は翌朝の新聞に載つたが、併しそれは欄外に小さく載せられてゐるに過ぎなかつた。その時分の節は未だ多く世に認められなかつたのである。

自分の暗い哀しい心の遣る瀬なく、私はその夜すぐに青山の齋藤茂吉氏に見舞の手紙を書いて、差出した。ほつとして、宿直室にかへつて、寢たが、容易に眠られない。曉近くなるまで私は眼を開いたまゝ床の上に横になつてゐた。

それ位、私は興奮してゐたのである。

二

節の村、鬼怒川の沿岸には櫟林が多い。これを屢文に書き歌にもよんでゐるが、小說「隣室の客」の冒頭に「私は自分の村を好んでをる。さうして櫟林を懷しいものに思つて居る」といつて、それから書きだしてゐる櫟林の描寫は精細を極めたものである。それは寂しい冬を送つて漸く春に會つた櫟の木の生長を叙して、これを氏自らの性的生活の變化に對照し、その類似から推して、氏が櫟の木を愛するゆゑんを說いた一節である。その描寫は一點一劃をもいやしくもしない尅明のものであつて、さすがに「土」の體驗者である節の本領を發揮してをる。あまりに細微にして、一篇の構想からいへば、却つて不自然に見え、讀者を倦ましむるが、併し作者は一向平氣でコツ〳〵と描寫してゐる。この缺點は「芋掘り」にも「敎師」にもあり、其他氏の作に共通の弊である。併し作者は描寫したくて堪へられないといふ風な跡が見える。恐らく作者は書かずにはゐられないであらう。兎に角節は櫟林を愛した。愛して到る處で之を描いてゐる。そこで、私は節のことを、私ひとりで「櫟の詩人」と呼んでゐるのである。土の歌人でもよい。草の畫家でもよい。同じ意味である。

櫟の描寫は長篇「土」の中にも屢現はれてをる。春先きの櫟林もあれば、冬の落木もあり、或る所には村のまづしい人々が、櫟の根を掘つて、冬の爐に焚く薪にするところもある。成程、考へてみれば、節の人と藝術には櫟の木に見るやうな、素撲と執拗と寂しさが

ある。そこには又根強い生命の力もある。牛の如く、田舍漢の如く、のろいけれども、靜かに強いのである。櫟もあらい粗野な木である。到底貴族富豪の庭園にあるべき木ではない。あくまでも田野に立つべき木である。節の藝術を象徵するところがあるではないか。節が櫟を愛したことには、可成に深い暗示がある。

三

「土」の批評を玆で爲やうとは思はない。農村問題への暗示、その自然描寫といふやうなことについては聊か後にいふ所があるであらう。併し「全人格の藝術」といふ標題を掲げた序でに一言して置きたい。

安倍能成氏は「土」を評して、

「土」にとるべきもはその眞實である。「土」は何よりも眞實を描いた作品である。而も之を描くに一點の浮虛をゆるさぬ忠實にして細心の態度を以てした。「土」にいかばりの離點があるにしても、この大いなる强味はどうしても力說せられねばならぬ。一生土にしがみつくべき運命を負はされた小作人の生活をかくまで丹念に描いた作品は他にない。又この位鄕土の人事や自然を細かな注意を以て叙寫した作品も外にはない。恐らく作者はこの小說を描くがために小作人の生活と鬼怒川の自然とを研究したのではあるまい。作者が永年の間觀察し、了解し、同情してゐた題材の蘊蓄をたま〳〵この作品に發揮したまでゞあらう。だから、この作品からはどうしても根强いしッかりとした眞實の重みを感ぜずにはゐられない。讀者がいかばかり面を背けやうとしても人生の嚴たる事實を如何ともすることが出來ぬ。苦しい眞實である。慘じめな事實である。これが人間の生活かとおもはれる事實である。併しこの事實には一點の浮氣も氣まぐれもない。恐らく若き享樂主義者のみならず苟も心あるものはこの事實の前に面して愴然として人生を考へざるを得ないであらう。繰り返していふ。これ實にこの作が有する眞實の力である。と。これは實に適評である。夏目漱石は後に引用する如く、「土」は自分には描けない、否な長塚君を除いては文壇の誰人にも描けないと賞揚し、自分の娘が年頃になれば、必ず、「土」を讀ませるつもりだとまで强調した。それは人の知る通りである。節をよく知つてゐ

る人は、節は「土」を描いて命を縮めたとさへいつてをるが、その觀察の細致、描寫の詳密、努力尅明の限りをつくして、けにこれこそは鄕土藝術としての日本文學の精髓であると信じられるのである。特にも、鬼怒川沿岸の農村を背景として、そこに營まれる哀れな人間の生活と、動植物の營み、景象の變化などは渾身の力を揮つて正確に又詳細に描寫されてゐる。これは彼が農村に生れ、農村に育ち、自然を侶とし、自然を體驗して、生きてゐたための結果に外ならぬ。些細のことを叙しても、それが一つ一つの彼の經驗から來てゐるので、實に肯綮に中る。例へば安倍氏もいはれてゐるやうに、或る席で、何かのきつかけに、一座が急にひつそりした時の有樣を

行々子土用に入えつた見てえに、ぴつたりしちやつたな

といひ、又例へば二百十日の空模樣を形容して

むつかしう日が射す云々

といふ如き、眞にものゝコツを得た言ひ現はし方であるとおもふ。後の言ひ現はし方は、誰かの俳句にも「むつかしう二百十日の日がさすよ」とあつたやうにおもふが、節はそれを知つてか知らずにか、それは分らぬが、とにかく、「むつかしう」といふ形容は面白い。

斯樣な例は幾らもある。與吉といふ子供が、田の畔につれて行かれ、母の仕事の間、ひとり遊びをしてゐるが、飽きて、泣きだしたところを描いて、

開いた口を土につける樣にして泣く

といつてをる。かゝる描寫は農村の生活をした者でなくては解り難いかとおもふが、實に眞に逼つてをる。斯樣な觀察と描寫とは「土」のみならず、氏の作品の特長である。たゞあまりに尅明であるために今の都會の人、特にも歎樂にあこがれる若い男女には苦しく、汚なくて讀みづらいであらう。これは仕方がない。

蛙の啼く頃、麥の穗のいづる頃、夏の夜の村の踊、念佛講、繭買ひ、春秋の野良の仕事木枯の頃などの田園の描寫、それは實に微に入り細を穿つてをる。

たゞ上にもいつた如うに、「隣室の客」の櫟の描寫などもその一例であるが、氏の小說には時々一局部に深く入り過ぎて、一篇全體との調和を缺くに至るの缺點がある。部分に興味を持ち過ぐるのである。それも多くは自然描寫である。これは氏があまりによく自然を

識り、自然に興味を持つてゐる所から、これを惜しむ心であらう。併しこの爲に冗長に陷るの弊は之を掩ふことが出來ない。それから時々氏は主觀的な語を挿んで、批判し詠歎する。フィロゾフィーレンする。これはどうも作品を低く、小さくする。無くもがなの感を起させる。例へば「隣室の客」の中で、主人公が或夜下女を冒してから、これが凡人の淺ましさであらうと、後悔し、自己辯護をする所であるが、これなぞは長塚氏のフィロゾフィーレンの一例である。この癖は氏の小説に屢出るやうである。

斯樣な點は缺點である。藤森成吉氏はかつて「土」を評して、時代意識の目ざめがないのを難じてゐた。併し「土」の書かれたのは明治四十三年で、下總國のみか、日本の農村は全國に亙つて、未だ、小作問題などの聲を聞かなかつた時代である。時代意識も階級鬪爭も作品の上にあらはれないのが、自然である。

四

節は小説を書き、歌をよむが、決して專門の文士ではない。百姓である。百姓も飯事の美的百姓ではなくて、實際に鍬を取り、肥料をいぢる百姓である。病氣で入院してゐても、百姓のことばかり心配してゐる。國許の兩親に送る手紙も常に田畑のこと、竹藪のことである。麥蒔きを遲らしたり、刈り入れの時期を失したりしたことを聞くと、腹が立つて、父母を叱りつけてをる。それ程、熱心な百姓であつた。

この不斷の注意と熱心が「土」となり、「芋堀り」となり、其他の作品となつた。「鍬の如く」の連作歌や乘鞍岳の歌もこの心の所產である。長塚節の人と藝術の偉大は嚴肅な位の眞面目と努力で一貫してをる。些事と雖も苟くもしないのである。

全人格的に動くといふ言葉があるが、節の藝術は卽ちそれである。一首の歌にも氏の面目がはッきりと見える。それは心にうそがないからである。制作の態度が嚴肅で、一線一描と雖も上の空で、いゝ加減に引いたものでないからである。決して手先きの器用ではない。直ちに身を以てぶッ突かるのである。渾身の力である。虛僞がないから、その熱が直に作品にあらはれる。藝術は言葉や繪の具の生むものでない。手先きの技巧の生むものでない。頭でも足りず、胸でも足りない。肉彈である。肉體そのもので描き、書くべきであ

る。これが全人格的に描くの義である。而して節の藝術こそは眞に彼の全人格の表明そのものである。

四　子規と節

一

節が人として又藝術家としてまことに稀有な人格であつたことは今や定論である。けれども節と雖も當初よりしかく偉大な人格であつた譯ではない。例へば、歌についても、その圓熟域に入つたのは、明治三十八年頃からであつて、それまでの歌には後年の大成を期待すべき特質は見えるけれども、大體に於て寫生的なる桂園調に過ぎない。眞面目ではあるが、それだけ未だ生硬で、藝術的感味に乏しかつた。決して才分の豐かなものといふことは出來ない。唯だ眞面目に努力を續けてゐるに過ぎないものであつた。

初期の歌について、齋藤茂吉氏は、「それは殆んど全く桂園調である。（中略）これを根柢

から覆して正岡流の歌をつくりはじめたのは、明治三十四年頃である。その頃は今から見ると、大分まづい歌をつくつてゐた。正岡氏歿後はひとりで勉強して、づん〳〵獨得の歌風に進んだが、正岡といふ光を戀ふて寄つたのが、尊とい因縁である」といつてをる。いかにも初期の桂園調の衣を脱がせて、節に萬葉調の精神を吹き込み、彼の歌眼をひらいたものは子規であつた。節は子規によつて藝術的に生くる道を敎へられたのである。

併しその關係のはじまり、卽ち茂吉氏の尊とい因縁の結ばれた最初は何んであつたか、それは極めて小さな偶然の出來事であつた。卽ちその原因について節は自ら次の如く語つてをる。

二十八九年とこの二夏鹽原へ保養に行つた（中略）鹽の湯といふ狹苦しい谿谷に六十日も滯在した。喧ましい鹿股川を隔てて鼻を突き合ふやうな雜木山に向つて退屈で仕樣も無かつた。かういふ所の習慣で相宿の客とは別懇に成り易いものなので自分も色々の人と交際した。大抵は入り替り立ち替りで暫くも止まることは無いが下野の矢板の在から來た人が長逗留をした。この人と格別に往來したが、この人が「日本」を見てゐた。自分はその時分國民や讀賣が好きで幾らか文學の趣味を解したつもりの自分は文學新聞はこればかりだなどとひとり決めをして、他のものには眼も貸さうとはしなかつた。處がその人のいふに近頃俳句の議論が「日本」に出てゐるが、中々六かしいものであるといつて見せられた。成程六つかしいものだと思つて、見は見たが、解しやう筈はない。併し一つ面白いと思つたのが、今に記憶してゐるが、それは「名月や裏門からも人の來る」といふ句のもの字が、悪い理屈であるといふのであつた、併しその時は論じた人が誰だか一向注意もしなかつた。さうして「日本」を見たのも、三日か四日に過ぎなかつた。この俳句の問答を書いたのは先生（子規）であつたといふことを知つたのは、ずつと後である。自分が先生の議論を見たのはこれがはじめてであつた。

二十九年だと節が十八歳で水戸中學を退いた年である。頭を病んで鹽原に療養してゐたがこの時はじめて子規の文を、偶然にも、見たのである。

節つゞけて曰く

それからこれも其の夏のことであるが、鹽原から歸つて近く發行せられた「世界の日

本」といふ雜誌を見た。世界の名士の肖像などが載せられてあるのをひどく面白く思つた。之に「我が俳句」といふ一篇が出てゐた。自分は一わたり讀んで見たが、むづかしくて薩張解らないやうに感じたが、何んだか面白い所もあるやうに思つた。その後さきにいつたが岡本が或る日自分の家に來たことがあつたが、その時に「わが俳句」の話が出てそれを岡本に見せた所が、此の獺祭書屋主人といふのは俳人子規の別號である。子規といふのは肺病でどうとかいふことを語つた。……自分の家では久しく「日本」をとつて居たのでこの時分から少しづつ、注目するやうになり、先生の句がいつも目につくやうになつた。これが先づ先生の名を知つたはじめなのである。

——その後いくらか俳句を面白く感じて來た時に先生の「歌よみに與ふる書」が出たので、もう十分にこの方に引き付けられてたうたう歌で教を受けるやうになつた。（明治三十六年十二月馬酔木第七號より）

年月は流れて行く。節は明治三十三年（彼が二十二歳の時）三月二十八日に至り、遂に上京して、初めて子規を根岸庵に訪ふたのである。三月三十日二度目に子規を訪ふた時、いろ〳〵歌の話を聞かされた後で、即詠を命ぜられ、大に當惑したが、已むを得ず、殆んど出鱈目に十首の歌を作つた。これが後に「竹の里人を訪ひて」といふ題で「日本」に掲載せられた十首歌である。即ち左の如し。

歌人の竹の里人おとなへばやまひの床に繪を描きてあり

荒庭に敷きたる板のかたはらに古鉢ならび赤き花咲く

生垣の杉の木ひくみとなり家の庭の植木の青芽ふくみゆ

茨の木の赤き芽をふく垣の上にちひさき蟲のいでて飛ぶみゆ

人の家にさへづる雀ガラス戸の外に來て鳴け病む人のために

土の人長塚節

ガラス戸の中に打ち臥す君のために草萠えいづる春をよろこぶ

古雛をかざりひひなの繪を掛けしその床の間に向ひてすわりぬ、

わか草のわづかに萠ゆる庭に來て雀あさりて隣へ飛びぬ

ガラス戸のそとに飼ひおく鳥の影のガラス戸透きて疊にうつりぬ

枝の上にとまれる小鳥君のために只一聲を鳴けよとぞおもふ（坐に剝製の鳥あり）

この十首を詠んだ時のことを節は語つて曰く、

（前略）かういふ話をきいてゐるうちに晝も過ぎた。先生は家族のものを呼ばれて線香に火を點ぜしめ聽てこの線香の燃え切る間に玆の實景を歌によめと命ぜられた。自分は

こんな事に遭遇したことが無いので少なからず不安心に感じた。已むを得ず筆を取つて出鱈目に書きつけたのが十首ばかりになつた。（中略）自分の歌は線香の燃え切らないうちに出來て仕舞つたが寧ろ意外であつた。先生は暫くたつて、筆を投げ捨てゝ、室内の器物をよんで見たといひながら紙片を自分に渡した。我が家の長物といふ題でその後日本へ掲載したのがその時の作である……其後三四日を經て日本にさきの十首が掲載されたのを見て自分は寧ろどうして掲載せられたかと驚いた。此の日から一日隔てゝ四月の一日自分ははじめて歌會に列した。在京の歌人と知合になつたのも此時である云々。

席上の即興十首は未だ深いものではないが、併し命ぜられて已むを得ず、出鱈目に詠みすてた歌としては中々上出來である。すつかり舊來の桂園調をすてゝ、子規風の寫生に成つてゐるところ、とくに注目すべきである。又在京の歌人とも知合になつたといつてゐる。その歌人とは岡麓、香取秀眞、赤木格堂等を指す。伊藤左千夫にもこの時はじめて會つたのである。子規は第二回目訪問の日は古今集の歌や實朝の八大龍王の歌なぞ引いて特に深切に教へてゐる。節は此日は忘るべからざる樂しい日であつたといつてよろこんでゐる。

二度目の訪問の時のことを節は更に語つて曰ふ。

一日を隔てゝ三十日に二回目の訪問をした。先生の姿勢はいつもの通りであつた。その時自分は國許から持つて行つた丹波栗の二升ばかりを出すとそれはどうして保存して置くのかといふやうな問ひがあつた。砂と交へて土中に埋めて置くといふやうな事を語るとうむと聞きとれない程に言はれてしばらくは默して居られた。自分は丹波栗を先生にすゝめたといふことで詠んだ二三首の歌を見せ、先生は只ぢーいと見つめて居られたが、その中の一つを、これだけは別に惡いこともないが、後のはもつと尻がしまらなくてはいけないのですといはれた。自分は嬉しいやうな、恐ろしいやうな氣がして聞いてゐた。それ等の歌といふものは固より自分でも嫌惡すべきものであつたのだから、先生に在ては必ず始末に困る位に思つたのであらうが、別に小言もいはれなかつた。先生のは後になつてもその通りであつたが、自分達の作つたものを見て貰ふのにはその作者が非常に拙劣で、隨分叱責されるやうな場合でも、最初はこの時のやうに唯だぢいと見て居られて、それから極く柔かに叱られるのであつた。比較的上作であつた時は直ちに面白いといふ一言で了るのである。拙劣な作であると、ものを言はれる迄には必ず少なからず時間がたつやうに感ぜられた云々。

師弟のおもかげまでが、この短かい文の中によくあらはれてをる。

その後節は年に四五回も上京した。時には一ヶ月あまりも滯在して、その間隔日位に子規をたづねて教へをうけた。「殆んど隔日位に詰め掛けて隨分と小言もいはれた——」「先生を訪問する者の中では自分は先づ一番近い所であつたが、歸つてくると淋しい通りは益々淋しくなつて家の者はもうぐつすり寢込んだといふ時分であつた。左千夫君などは家へつくと三時が鳴つたなどといふ事が敢て珍らしいことではなかつた。」——斯う節は語つてをる。その勉强ぶりが見るやうである。節は上京すると不忍池のほとりの家に泊つてゐて、上野の森を越えては、根岸庵へ通ふたのである。

彼の道はずんすん展けて行つた。入門後二年目に

青傘を八つさしひらく棕櫚の木の花咲く春になりにたらずや

總の芽のほどろに春のたけゆけば今さらさらに都し思ほゆ

荒小田をかへでの枝に赤芽ふき春たけぬれど一人こもり居

都邊を戀ひておもへば白樫の落葉掃きつゝありがてなくに

思ふこと更にも成らず枇杷の木の落葉の春に逢はくさびしも

春畑の桑に霜ふりさ芽立ちのまだきは立たずためらふ我は

などと詠んで、同門の伊藤左千夫から「奇想縱横、聲調溫雅、何等の妙趣何等の風韻、而して又吾人の理想にかなへる連作、從來同人の作中絶えて其比をみざる逸品なり」と褒めちぎられ、師の子規からは、萬葉の言葉を自由自在に驅使して一首の結びをつけた處は、他に一頭地を擢んじて居る、と推賞せられてゐる。進境見るべきである。

三

節はよく勉強した。子規もまた親切に教へた。とくに晩年には最も節を愛し、節に望みをかけてゐた。かくて二人の魂はしつかりと抱き合ひ、左千夫をして

親子としてはあまりに理想的で、師弟としてはあまりに情的である。故に余は之を以て理想的愛子と名づけたい。

と稱せしむるに至つた。

子規は節が上京して、訪ねて來ることを非常に喜んで、その亡くなる前の年にも、斯んな歌を詠んでをる。

下總のたかし來れりこれの子は蜂屋大柿われにくれし子

しもふさのたかしはよき子これの子は蟲食栗をわれにくれし子

春ごとに總の木の芽を送り來る結城のたかしわれは忘れず

子規にとつては節はまことに『よき子』であつたのである。

病床の師を慰めんとして、節は四季折々に山のもの、畑のものなどを贈つた。春毎に總の木の芽を送りくる、と詠んだのはこの爲である。總の木を私は未だはつきり知らぬが、節の地方には中々多くある植物と見える。春その芽を摘んで食用に供する。節は之を好んで、自ら「總芽」と號した程で、子規へも春毎に贈つて來たのである。

年の夜の鰯のかしらさすといふ總の木の芽をゆでて食ひけり

とも詠んで、節に與へてをる。

又三十五年四月の子規の手紙には

一、野兎一匹
一、ひしほ、夫婦餅、つくばね
一、木の芽
一、ねり梅

右下され、ありがたく候。一度に御禮申上候

とある。木の芽は即ち總の芽である。ひしほも木の芽もねり梅もみんな、本當の意味の土産(みやげ)ものである。野兎一匹などは、とりわけ、野趣があつて面白い。

節の子規に送るものはいつも山のもの、川のもの、畑のものであつた。土臭いものばかりであるが、そこに却つて親しさがある。子規はそれ等の禮を述べ乍ら、又いろ〳〵の注意や註文を書き送つてゐる。三十五年八月十九日附の手紙には

今、君にもろうた大和芋（一般につぐ芋といふ）を食ひながらつく〴〵考へた。この芋が君の村で今初めて植ゑたといふ程なら君の村は實に開けてをらぬ野蠻村に違ひない。恐らくは小學校もないであらう。若し尋常校があるなら高等校はないであらう。兎に角子供は學校にも行かないで鼻垂れてゐるのが多いであらう。從つて農藝などは少しも進歩してゐないであらう。思ふに君の村では君の一家一けんだけ比較的開けてゐて他は盡く野蠻なのに違ひない。

そこで僕の考へるのに、君には大責任がある。それは君は自ら卒先して君の村を開かねばならぬ。學校も立てるがいゝ。村民の子弟の少し俊秀なのものならば、君は學資を出

して東京へでも水戸へでも出し、簡易農學校位を修業させてやるがよい。其外農談會とか幻燈會とかを開いて村民に智識を與へねばならぬ。

といつて、村の先覺としての節の責任をも說き聞かせてゐる。子規は節にとつては、單に歌の師匠のみではなかつたのである。後にいふ如く、節は後年農事の改良、靑年の指導に力を致し、大に村のためにつくしてゐるのであるが、その原因の一はやはり子規の訓へである。

子規と節の密接なる關係は上の如くであつた。節はまことに子規の理想的愛子であつた。然るに天は無情にして、この愛子のために父とも師とも仰ぐべき子規の命を、入門後僅かに二年有餘にして奪ひ取つてしまつたのである。卽ち子規は明治三十六年九月十九日遂に起たなかつた。節にとつては、まことに歎きても歎きても、あきらめられぬ哀しみであつたに違ひない。相會ふこと何ぞ遲くして、相別るゝことの何ぞ速かなる！　節は斯う心に歎き悲しんだことであらうと思はれる。

四

子規の訃報の到つた時、節は村にゐて栗をしてゐた。子規に新栗を贈らうとでも思つたのであらう。卽ち歎いて曰く

年のはに栗は拾ひてさゝげんと思ひし心すべもすべなき
捧ぐべき栗のこゝだもかきあつめ吾はせしかど人ぞいまさぬ

初七日に畑にて

わが心はたも悲しも友ずれの黍の秋風やむ時なしに
もろこしの穗ぬれ吹き越す秋風のさびしき野邊にまたかへり見む

節の悲歎、さこそと、察するにあまりある心地がするのである。

年が明けて、又春が來た。椿の木は今年も柔かな芽を吹いた。先生にあんなに喜んで貰つた木の芽である。採つて送りたいが、送るべき先生も今は此世の人でない。

さう思ふと遣瀨ない思ひが胸にこみ上げて來る。

楤の芽

四月十七日雨ふる。うらの藪の中へ入りて見るに楤の木の芽いやながに萠えいでたり。亡師の下へとしく〳〵におくりけるものを、今はそれもすべなくなりぬ。

朝さらずつぐみ鳴くなる我が藪の楤の木みれば萠えにけるかも

春雨の日まねく降れば楤の木の萠えてほうけぬ入りも見ぬとに

たらの木のもゆらくしるく我が藪の辛夷の花は散りすぎにけり

楂刈るわが竹藪のたらの木は伐らずぞおきしもえば折るべく

春雨にぬれつゝたらは折らめども折りきと告げむ人のあらなく

藁つゝみたらの木の芽はおくらまく心は今は空しきろかも

めでぬべき人もあらぬに徒にもえぞ立ちぬるそのたらの芽を

折らゆればすなはち萠ゆるたらの芽のまたも逢ふべき人にあらなくに

春雨のしきふる藪のたらの木のいたくぞ念ふそのなき人を

この植物を通して、作者の哀情はいみじくも表現せられてをる。

五

子規は明治三十五年九月、三十六で死んだが、生涯獨身であつた。節は大正四年二月、三十七で死んだが、やはり生涯獨身であつた。而も兩者共に結核病のために死んだ。節の

病氣は子規のそれほどに業病ではなく、從つて子規程の苦惱はなく、且つ家には父母兄弟あり、又豐かに暮してゐたので、物質上の苦しみは無かつたであらう。子規が六年間の久しき間、まるで阿鼻叫喚の地獄だと、歎いてゐる程の、悲慘な病床生活に苦しめるに反し、節は死の前年に、南九州の旅行をやつて歌を作つてゐる。この點は節が頗る多幸である。併し嚴しく、寂しく、少しも華やかなところのない、ピュリタニックな、例へば冬の曠野のやうな、みじめな生涯は二人とも實によく似てゐる。子規は仰臥漫錄の中で

家庭ノ快樂トイフコトイクラ云フテモワカラヌ

と自ら感懷を洩らしてゐるが、これは一家團欒の趣味を解せずといふ意味ではなくて、女人の趣味を解せずといふ意味であらう。或は結婚生活にそれ程高い價値をみとめないといふ意味であらうと思はれる。日々拷問にかけられるやうな病苦裡にあつた彼の眼に、女性や戀愛や結婚や、さういつた人生の明るい方面が大きな意義をもたなかつたことは當然である。これは子規の歌に相聞が見出せないのを見てもわかることである。子規の歌は殆んど皆病氣の歌である。

この點では節は可成明るさをもつてをる。一生獨身ではあつたが、思ひ妻はあつた。そのために苦しんでもをるが、又慰められてもをる。その事は後に述べる。彼の歌の中に病氣と織り交ぜに戀のあるのは、薄命の彼のためにいさゝか嬉しい氣がする。

節は二十二で子規に入門し、二十三、四ではもう相當な歌をつくてをるが、子規は二十四の時は大學の一年生でまだ俳句をつくらず、歌はつくつたが、自らくだらぬものをひねくッて見るに過ぎなかつたといつてをる位である。歌に手を染めたのは三十歳近くになつてからの事である。されば節の早熟に反し、子規は歌の上ではかなり晩學の方である。これは兩者著しく異なる點である。

とにかく、子規と節との師弟關係は明治文學の上に頗る大なる貢獻をなすの機緣をつくつたものと云へる。而も殆ど同じ享年を以て、同じ結核病のために倒れたのであつて、實に奇しき因緣といはねばならぬ。

五　左千夫と節

一

節が三十三年三月二十八日、二十二歳にして始めて子規を訪ねたことは、前の章にいふ如くであるが、その年四月の根岸庵歌會に列して、はじめて左千夫と相知つた。左千夫はすでに子規門下であつたが、併し左千夫がはじめて子規を訪ふたのはやはりこの三十三年といふ年である。その一月三日に始めて子規を訪ふてゐる。節の子規入門に先だつ事わづかに二ヶ月である。併しこの時左千夫はすでに三才七歳の年盛りであつた。二十二歳の節と三十七歳の左千夫とがわづか二ヶ月ばかりの間をおいて、同年に子規門に入つたのであつて、これが明治大正に於ける歌道復興の動因と成つてをる。不思議な因縁であるともいへやう。これでみると、節の早熟に對し左千夫は頗る晩學の人であつた。

かくて左千夫と節とは年齢こそ違へ、同時入門の關係上、君僕の友人の間柄であつた。但だ左千夫が年長で、東京に住み、雜誌の編輯にも當つてゐたために、おのづから子規沒後の根岸派の中心となつたのである。島木赤彦氏や齋藤茂吉古泉千樫氏あたりからいへば、節は友人のやうな先輩であり、左千夫は『先生』である。これは地理や年齢や集團の歴史的關係なぞから、しぜんその樣に成つて行つたものと思はれる。又左千夫といふ人にはどこか、大きなところがあつて、一方の將たる器量をおのづから備へてゐた。そんな次第から、假りに根岸派の系統をいへば子規、左千夫、赤彦、茂吉がその直系といふことになり節は傍系になるのである。

左千夫と節とは歌の上では、屢激しい議論を闘はしてゐるが、併しその私の交際は親しく、美しいものであつた。よく一緒に旅行したり、歌を作つて贈答し合つたりしてゐる。三十六年にも、左千夫は平福百穗氏と共に筑波山に上り、翌日節の家に行つて泊つたが其時の歌に「岡田村」五首がある。そのはしがきに

六月二十七日平福百穂と筑波山に至る。長塚總芽（節のこと）又岡田より來て登山を共にす。翌々二十九日長塚が家に宿る。曉雨新たに晴れて邸宅清麗を加へ、庭苑の竹木又相悅ぶに似たり。卽ち作歌數章後の記念に充つ。

として、

さぎり立つ岡田の里は朝鳴きに松雀しば鳴く家の忌森に
旅なづみ足なやむあけの朝庭の松雀が鳴くを床ぬちにきく

以下五首の歌がある。三十六年といへば子規の死んだ翌年である。

節から左千夫に送つた歌には三十八年に「行々子」の歌がある。

垣の外ははちす田近み慕ひ來て槐の枝に鳴くかよしきり
堅川の君棲む庭は狹けれどよしきり鳴かば足らずしもあらじ

など八首の連作である。左千夫の家は本所茅場町で、堅川に近く、少し雨がふればすぐに水の出る低地であつた。槐の樹は家の前に並んで、場末の工場の煤煙に煤けて立つてゐた。

この連作には

六月なかば左千夫氏の來狀近く山百合氏の來るをいふ。且つ添へていふ、庭前の槐に行々子頻に鳴くと、兩友閑談の狀目に賭るの思ひあり、乃ち懷をのべて左千夫氏に寄す

といふ詞書きがある。

之等の贈歌はいふまでもなく二人の友誼の深かつたことを語るものである。子規の歿後は、子規によつて礎を据ゑられた根岸派の流れは、遺された門弟友人等の人々によつて、引繼がれ、又育て上げらるべき運命になつてゐた。卽ち、上總の蕨眞、蕨櫪堂の兄弟、東京の伊藤左千夫、香取秀眞、下總の長塚節、さういつた人々の手によつて子規に蒔かれた種子は、芽を出し、生長し、結實せしめられなくてはならぬ次第に際會してゐたのである。子規の死は短歌革新運動の經過からみればあまりに早かつた。それだけ、これを繼承した右の人々の責任も重かつたのである。

二

子規の歿した翌年、即ち明治三十六年に「馬酔木」が伊藤左千夫のところから創刊せられた。六月のことである。左千夫は四十歳の年であつた。これから根岸派の人々の歌や歌論はすべて「馬酔木」に掲載せられた。創刊號の表紙裏を見ると、同人として、伊藤左千夫、香取秀眞、結城素明、岡麓、平子鐸嶺、蕨眞、長塚節、安江廉、森田義郎の九氏の名が列ねられてある。雜誌は菊版三十二頁、定價一部十錢、郵稅五厘とあるのもおもしろい。

「馬酔木」はその後引續き發行せられたが、遂に四十一年一月一日發行の第四卷第三號を以て廢刊せられた。五年間の努力であつた。三井甲之氏を編輯主宰者とする「アカネ」がその翌月を以て生れた。左千夫は終刊の辭に於て、「歌道新興の發展上、子規子の活動はその第一期に屬し、馬酔木五年間の奮勵はその第二期を劃したりといふべし。而してアカネの責任は第三期の成功を遂げんとするにあり、といつてをるが、これは歌道革新運動の

歴史を編む者の知つて置くべき言である。又曰く

蕨眞君長病根本より癒えて健康舊に加はり、益斯道につくさんとするの決心あり。今後諸同人の活動上必要の時機に際せば何時なりとも、獨力一切の經費を負擔して道の爲に盡すところあらんと誓はる。節君は年漸く三十にして精力更に加はりたるを覺ゆ。予又萬葉新釋の外、敢て餘勇を鼓し、創作上に於ても猶諸君と鞍を並べんことを期す。

と。この言葉は左千夫自身の抱負を語るものであるが、この中に、我等は又、其後間もなく、（同年九月）蕨氏が上總埴谷の自宅からアラヽギを創刊するに至れる事情の經緯を見るのである。アラヽギはその翌年、即ち四十二年九月に至つて、東京本所の伊藤左千夫宅に發行所を移すに至つたが、これが、今日のアラヽギの始まりである。

子規歿後に於ける根岸派の生長は右の加く、馬酔木からアカネを經てアラヽギに及んでをること右の如く、又同じ子規門としての左千夫と節との關係も略右の如くである。私的の交際は深かつたが、併しどちらも藝術上のことに就いては自信の强い方で、二人はよく議論を闘はした。双方互に容易に下らなかつた。これは俳句の方で、同じ子規の門から盧

子と碧梧桐が出て、立場の相違から兩々對峙して下らなかつたとよく相似てをる。

三

節は歌の上では徹底的に客觀を重んじ、寫生を尊重した。

予は不圖考へた。直ちに天然に接觸して、寫生をするといふのが、現在の急務であると考へた。何だか嬉しい氣がある。種々の推測が湧いて來る。萬葉調の歌に傑作を出したもので後に更に聞えないものがあるが、かういふ人の傑作といふものは、萬葉のつけ元氣に過ぎない。自分といふものに歸らないから再び奮ひ起ることが出來ないのである。天然を寫生することに努めたならば屹度その弊を除去することが出來やう。こんな事も胸に浮んだ。自分で試みる。面白い。すべての天然物が皆面白い。暫くはこの眞面目な寫生に立脚地を定め樣とした。

と三十八年五月の馬酔木で、左千夫の批難に答へ、且つ自分の信ずる所を述べてをる。節が二十七歳の時である。

然るに左千夫は彼の主觀主義の立場から節の寫生說並にその作物を批難攻擊した。卽ち彼は俳句の客觀（自然）と和歌の主觀（感情）とを嚴に區別し、和歌は詮ずる所人間の感情の表現であるからして、之に寫生の語を以てするは當らぬ。寫生とは自然に對していふ言葉であり、從つて俳句の世界に於て用ふべく、歌の上では困るといふのであつた。三十八年五月馬酔木所揭歌譚抄の一節に曰く

普通の談話上に、寫生の歌とか客觀の歌とかいふ場合は、輕い意味で云ふのであるから、敢て差支へないが、一つの議論又は批評の場合に稍改まつての詞であると此寫生とか客觀とかいふ詞は歌の上では困る。正岡先生の評論を見なさい、皆寫生的客觀的といふて居る。卽ち寫生らしい歌、客觀らしい歌の意味である。寫生文といふてをるが、あれも嚴格の意味でいふのではない。寫生といふことは繪畫に就ていふ詞で、一概に使用する場合は皆寫生的といはねばならぬ。況んや歌の如き形式の拘束ある上に調子を以て居るものに對して云へる詞ではない。調子を得やうとすれば直ぐ寫生でなくなる。寫生らしくやらうとすれば調子はなくなり、到底兩立しないものである。畫の方でさへ流派

の調子を重んずれば寫生は次になる。寫生を主とすれば流派はなくなる。繪畫がすでにそれであるのに、歌の上で寫生をするといふことは殆ど滑稽である。止むことなくば寫實とでもいつて置くがよからうと思ふ。（中略）もし嚴格な意味で云ふならば、寫生若くは純客觀の趣味といふことは、歌の性質上、有り得べきものでないと明言し得るのである。

又曰く

吳春や應擧が寫生々々といひ乍ら眞の寫生をやつて居らぬ如く、わが長塚君も盛んに寫生を唱へながら、御自分の作中往々寫實すら缺けて居るを發見する。

又曰く

長塚君がいくら寫生々々と騷いでも、連作の必要を自覺せぬ間は、長塚の寫生論に耳はかされぬ。なぜなれば、連作は寫實の上に非常な力あるものである。連作でなければ少しく複雜な詩境を歌で寫し出すことは出來ない云々

と自分の連作論を唱へ、一轉して

要するに長塚氏の歌は今のところ、寫生的卽寫生らしい歌ともなつて居らぬ。寫生臭い歌といふ位であらう。かうのべつに辯じられては問者も閉口かハ、、、、、それぢや一服やらう、もう空論はよして次には、長塚先生の選歌について一番精酷なる批評をして見ようか、さうサ長塚氏も僕の歌を評して見るがよいさ

など、大ぶ輕い口の利き方をして、節を難じてゐるのである。

けれども節は寫生の主張については強い信念を抱いてゐた。それで、左千夫の批難に對しても決して負けてはゐなかつた。同じ雜誌で、左千夫に答へて節は左の如き言をなしてゐる。

左千夫氏の論は要するに、寫生は歌に不可能であるといふことである。批難の點も多くは予の制作に向つて試みられてゐるやうであるが、予の制作の不完全であることは予も亦認めてをる。制作に向つての批難についで來るべき制作の上に警めとなるべきもので予はひそかに喜ぶのである。併し乍ら「感じをあらはす」といふ寫生の目的が歌に不可能であるといふことは服し難い。吾々の歌には未來がある。左千夫氏は或は予を以て沒

分曉滿とするかも知れないが、予は暗中に何物かを認めるやうな氣がする。理屈の問題ではない。究極まで進んで見るのもいゝではないか。山の中途で雨に逢つたと想像せよ。自己の周圍は殆どみえない。着物は濡れる。まことに馬鹿氣てゐるやうである。予の現在がそのやうな趣きがあつたとしても平地より高いではないか。

これは三十八年五月の馬醉木所掲歌譚抄をよみての一節である。暗中に何物かを認めるといふのは、面白い。

又曰く

左千夫氏は予の歌を以て寫生に非ず、寫生らしきものにもあらず、寫生臭いものに過ぎないと居つて居る。それもいゝ。又いくら寫生々々と騒いでも、連作の必要を自覺せぬ間は、耳はかされぬといつてをる。それもいゝ。まゞぢつとして見て居て貰ひたい。夏の短夜でも明けるまでには時間がある。

飽きるまではやるのである。

節も決して負けてはゐないのである。更に曰く、

左千夫君は予の歌を以て俳趣味の歌であるといつてゐる。名義はどうでもよからう。客觀の趣味を幾分でも解し得たならば、それだけ俳句と接近して來るのはいふまでもない。俳句に眞似をしたならば陋劣であらう。趣味を捉へてするに何の惡いことがある。故先生が俳想俳調厭ふべしと或る歌に下した批評を例に引いてゐるが、それは何年前のことであるか。それがどのやうな歌であつたか。俳想俳調厭ふべきからさういつたのだ。直ちに客觀の趣味に接觸したものに、何んで厭ふべきものがある……俳句の趣味を解するものは主として客觀の趣味を解するものである。客觀の趣味を解してつくる歌を俳想なりといふことが出來たら、それもいゝだらうが、その時に用ふる俳想といふ文字の意義は變化して來なければならぬ。俳句が最も得意とする客觀の趣味を歌にしたものは以前故先生を除いて一人もない。必ずしも俳句獨占の趣味とはいへない。少くとも俳句が得意とする客觀の趣味に接觸するといふことは狹隘なる短歌の上にどれだけの功績があるか。いふの必要はあるまい。

これは三十八年九月の馬醉木に載つた枯桑漫筆中の一節である。子規はかつて自分の短歌

革新の運動は歌の形式をもつて俳句の内容を歌ふにあり、三十一字の俳句をつくるにありといつたが、今、節はこゝで、俳句の最も得意とする客觀の趣味を歌にしたものは故先生の外に一人もないといつて、子規の事業の裏書をしてをる。子規の主張を節はさながらに繼承しこれを擴充した。

節は又、同じ文中で

我々のすることも三年とも五年とも經過してはゐないのであるから、周圍の人々はよろしく培養の心を以て之に臨むべきではあるまいか。鐵槌を以て打ち壞はすやうな態度は冷酷に過ぎるであらう。

といつてをる。

斯樣に、二人は歌の上ではずゐぶんと激しい爭論をやつてをる。時には皮肉や揶揄さへも交ざつてをる。けれども子規をとほして萬葉に參することに於て異なるところはない。今日の吾々から見れば、この二人は、共に、同じ萬葉調の流れに棹さす同舟の人であつて、その根本に於ては著しい相違がある譯はないと思はれる。唯だその好尙や性格の上からして、左千夫は感動を尊重し、節はより多く自然を尊重したといふに過ぎない。環境の支配から來る相違もあつたであらう。けれども節の寫生道に忠實なことは實に驚くべきものがあつた。村に生れ、村に育つた彼としては草土への愛着が彼の本能となり、それが藝術に向つたのであらう。自然を凝視し、自然を愛し、自然に驚きつゝ、草土の中に一生を送つた彼の心情の純粹にはしみ〴〵と心がひかれる。この心持は人間のもつ感情のうちで最もゆたかな、美しいものに違ひない。自然への愛は次第に深くなつて行つたのである。彼の寫生の主張は、いふまでもなく、自然を歌ふことに本能的の歡びを感ずる彼の滿足の要求であつた。

三

併し歌を以て、己れの生甲斐とする、眞劍の態度に至つては左千夫も節も同じことであつた。歌の上では議論も鬪はす。けれどもそれは究極の理想に達する過程に於いての事であつた。作歌を閑人の閑事業として蔑視することなく、直ちに大丈夫の精力を絞り盡して

も到り難き大業たると共に又それだけ人間の力の及び難き境地であるとした事に就ては、この二人者は同じ心持に在つたのである。

明治四十年、節より左千夫に送つた五首の歌はこの心持をあきらかに現はしてゐる。

左千夫に寄す

蒼雲を天のほがらにいたゞきて大き歌よまば生ける驗(しるし)あり

大丈夫のおもひあがれる心ひらき匂はす花は空も掩はむ

春の野にもえづる草を白銀の雨をふらして濕ほすは誰ぞ

大丈夫は眠れる隙にあらなくに凝りとゞこほる心は持たず

春のひかり到らぬ闇に住みなばかくぐもる心蓋し持つべし

大空は高く遙けく限りなくおほろかにして人に知れずけり

大き歌よまば生ける驗(しるし)あり！　この大きく高い心は左千夫も節も同じであつた。それほどの雄々しい心を持つて歌道に携はつてゐたのである。その抱負と自信とは吾々の大に習ふべき點である。

節の左千夫に寄せたこの連作の歌調の强さ、朗かさはさながらに、この二人者の心事を顯現してをる。

子規の建てた歌道のバラックは左千夫と節との二人者によつて立派に本建築に直された。そして赤彦や茂吉やその他の人々はこの本建築に造作をしてゐる。と、斯うも見ることが出來るであらう。——子規——根岸歌會——馬酔木——左千夫——節——蒼アラヽギ——現在のアラヽギ。斯う系統的に見る時、私はいつも右のやうな感想を抱くのである。

四

最後に島木赤彦氏の左千夫對節觀を引用してこの章を終るとしやう。

左千夫先生は長塚さんの歌を冷かだ〳〵といつてゐる。長塚さんは左千夫先生の歌を何といつてゐたか僕は聽かなかつたが、小說などは左千夫君のは無茶だといつてゐた。左千夫先生はよき人と二人で寫眞をとつて歡んでゐる程の所があつた。愛したらもう何うしても抱いて居らねば滿足出來ぬといふ所があつた。我々との交りでもさうであつた。アラヽギ同人の一人なしを懷へ抱いて居たいといふ所があつた。長塚さんはそれに對して著しく孤立的であつた。「伊藤君が僕の寫生の歌へあまり茶々を入れたから僕の歌は中絕した。未だ手をつけたばかりで生長せぬうちから寫生歌を攻擊するから僕は自然打棄つてしまふやうになつた。」と二三度長塚さんが話したことがある。そこへ行くと、左千夫先生は茶々を入れられゝば入れらるゝ程興奮して歌を作るといふ方の側である。これも二人の面白い對照である。左千夫先生は歌は「響」であるといつて居られた。長塚さんは歌は「冴えなくてはならぬ」といつて居られた。

面白い言葉である。斯樣な側面觀は一人の人物を知る上に、敎へらるゝ所が多い。今日のアラヽギは歌壇の勢力であるが、それはその昔子規や左千夫や節等が苦心した結果を相續したことにも負ふ所が多いのであつて、これは今のアラヽギの人々の幸福である。同時にこの家督を次の時代へ傳へることがその大きな義務である。

六　自然の人長塚節

一

節の歌の最も秀れてる點はその「自然」を、「自然の心」を、しッかと摑んで、手放さぬ把握力にある。これは寫生とか描寫とか詠歎とかいふ如き言葉では言ひつくすことが出來ぬ。人と自然との交靈であつて、極めて深いものである。さうだ、交靈である。節といふ人だけは「自然」と共に語り、「自然」と共に遊ぶことが出來た人である。

これだけ深く自然に入り込むことは普通のものには先づ出來ない。體驗であり、愛であり、心熱である。

それ故、吾々には何の興味も持ち來たさぬ所の一本の草木も一匹の蟲けらも、節の眼には不思議に面白く映ずる。春が來た！　秋になつた！　といふやうな季節の變化も節の心にはいふべからざる興味を起させる。つまり、草深い田舍にゐても、節の心は自然に惠まれて、寂しくも、苦しくもない。その精神生活は却つて豐富であつた。

明治四十年、彼が二十九歳の時の作に「早春の歌」一篇がある。彼の傑作であり、又私の愛誦歌である。

天の戸ゆ立ち來る春は蒼雲に光どよもし浮きただよへり
春立つと天の日渡るみむなみの國はろかなる空ゆ來らしも
蒼空のそぐへを見れば立ち渡る春はまどかにいや遙かなり
おほどかに春はあれども搖り動く榛が花にも滿ち足ひたり

いささかも春蒸す土のぬくもればるさらひ輕み雲雀は立つらむ

麥の葉は天つひばりの聲ひびき一葉一葉に搖りもて延ぶらし

おろそかにい行き到れる春なれや青める草は水の邊に多し

天日の光。青空の色。うら〳〵としてすでに春である。麥の葉は伸びてゆく。土のぬくもりに雲雀は聲ひゞかせて鳴く。水邊の小草にも搖り動く榛の花にも最早春光はなごやかに動いてをる。

節の村はすでにいへる如く、下總國結城郡、鬼怒川の岸である。そこには森と田と、森にかこまれた畑が打ちつゞき、川土手の草は夏も冬も筑波の風に搖られてをる。榛の樹や櫟が多く、竹藪や松山は自然の風致である。節の家は農を業とし、多くの小作地を有つてゐる。節はその家の長男であるが、中々百姓のことに熱心である。自ら堆肥をつくり、炭を燒き、竹林をつくり、又村の者をあつめて自宅で農事改良の話をしてきかせるといふ風である。青年會の會長ともなれば、小學校長と相談して補習教育にも力を入れた。この事は後に詳しくいふ積りであるが、斯ういふ事實を知つてゐなければ、右の歌のもつ自然味がわからない。これが解ると、歌に深い春の息吹の通へることが容易に解るのである。「春蒸す土のぬくもれば」といふやうな言葉のうちも、深い〳〵味がある。

「土」の中の春の描寫を參照すると、尙よく解る。

少しく引かうか。

春は空からさうして土からかすかに動く。毎日のやうに西から埃を捲いて來る疾風がどうかするとハタと止つて、空際にふは〳〵とした綿のやうな白い雲がほッかりと暖かい日光を浴びやうとして僅かに立ちのぼつたといふやうに動きもしないで、ぢつとしてゐることがある。水に近い濕つた土が暖かい日光を思ふやうにいつぱい吸つてその勢づいた土のかすかな刺戟を根に感ぜしめるので田圃の榛の木の地味な蕾は眼に立たぬ間に少

しづつ伸びてひら〳〵と動き易くなる。その刺戟から蛙はまだ蟄居の狀態にあり乍ら稀にはそッちでも、こつちでもくゝと鳴き出すことがある。空からさす日の光はそろ〳〵と熱度を増して土はそれを幾らでも吸ふて止まぬ。土は凡てをだん〳〵と刺戟して堀のほとりには葦やとだしばやその他の草が空と相映じてすッきりとその首をもたげる。柔かに滿たされた空氣を更に鈍くするやうに榛の木の花はひら〳〵と止まず動き乍ら煤のやうな花粉をまき散らしてゐる。（「土」六より）

この一節をよんで、前の歌にのぞむと、何人でも成程なァとうなづかれるのであらう。

二

早春にも蛙は鳴くが、それは晩春から初夏にかけて一層さかんとなる。蛙のコーラスは何となく人の心を浮きたゝせて、村には缺くべからざる春の音樂である。

節には四十一年に「晩春の歌」一篇がある。

さびしらに母とふたりし見る庭の雨に向伏すやまぶきの花

山吹のはなの黄染をそこらくに洗ひおとして雨ぞしきふる

雨ふりてさびしき庭も耀斗菜の一むらゆゑに足らずしもなし

菜の花の乏しき見れば春はまだかそけく土にのこりてありけり

すがすがし樫がわか葉に天響き聲ひびかせて鳴く蛙かも

車前草の花が咲かむと嬉しとてかはずは雨にきほひてや鳴く

蛙らはみな塗り込めの畦越えて遠田こち田と鳴きめぐるらし

やはらかに繁き林が梢よりほがらほがらと春は去ぬらむ

「土」には蛙のこゑは斯うある――

水が欲しいと人が思ふ時蛙は一齊に裂けるかと思ふ程咽喉の袋を膨張させて身を撼がし乍ら殊更に鳴き立てる。白い絃糸のやうな雨は水が田に滿つるまでは注いでは又注ぐ。鳴くべき時に鳴くためにのみ生れて來た蛙は切株を引つ返し引つ返し働いてゐる人々の周圍から足許から逼つて敏捷にその手を動かせ動かせと促して止まぬ。蛙がぴッたりと聲をのむ時には日中の暖さに人もぐつたりとなつて田圃の短かい草にごろりと横になる。更に蛙はひつそりと靜かな夜になるといかに自分の聲が遠く且つ遙かに響くかを誇るものゝ如く、力を極めて鳴く。雨戸を閉づる時、蛙の聲はめつきりと隔つてそれがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて百姓の凡てを安らかな眠りに誘ふのである。熟睡することによつて百姓は皆短かい時間に肉體の消耗を回復する。彼等が雨戸の隙間からさす夜明の白い光に驚いて蒲團を蹴つて外にでると今更のやうに耳に迫る蛙の聲にその覺醒を促されて井戸端の冷たい水に全く朝の元氣をよび返すのである。草木は遠く遙かに響けよと鳴くその聲にゆすられつゝ夜の間に生長する。櫟や楢やその他の雜木は蛙が鳴けば鳴く程さうしてそれが鳴きやむ季節までは幾らでも繁茂することを繼續しやうとする。そこには毛蟲やその他の淺ましい損害が或は有るにしてもしと〳〵としば〳〵梢をうつ雨が空の青さをうつしたかと思ふやうに力強う深い線が地上を掩うてさわやかな涼しい蔭をつくるのである。

鬼怒川の西岸一部の地にも斯うして春は來り、且つ推移した。憂ひあるものも無い者も等しく來耙を執つて各々その所についた。勘次もその一人である。

歌と文と相俟つて、節の自然の世界がいかにもあり〳〵吾々の眼前に展開する。一匹の蛙とその聲を叙するにも節はこれだけの努力をしてをる。私のやうに、田園に育つた人間は、これによつて、ほんとうに蛙を聽くやうな氣分に浸ることが出來るのである。文も歌も、蛙をかくまでに描寫したものを、私の寡聞なる未だこれを聞かない。

三

節は三十九年房州に旅行し、清澄山で炭燒きの仕事を見學したが、その頃から、改良炭

燒の研究を思ひ立ち、遂に自ら庭つゞきの竹林の中に炭竈を築き、醋酸石灰の製造を初めた。三十八年の歌「炭燒くひま」及三十九年の「炭燒の娘」（富生文の傑作として節の名を高からしめた作）はその結果の制作である。歌を擧げて置く。

春の末より夏のはじめにかけて炭竈のほとりにありて詠める歌のうち

積みあげし眞木に着せたる萱菰に燒みてとゞく棕櫚の木の花

炭がまを焚きつけをれば赤き芽の柘榴のうれに入り日さし來も

芋植うと人のいで去れば獨り居て炭燒く我に松雀しき鳴く

炭竈の灰篩ひをれば竹やぶに花ほの白しなるこ百合ならむ

樹木のふさに垂り咲く花ちりて世の炭がまは燒かぬこの頃

炭がまを夜見に行けば垣の外に迫るがごとく蛙きこえ來

炭がまを這ひ出てひとり水のめば手桶の水に樫の花浮けり

厩戸にかた枝さし掩ふ枇杷の木の實のつばらかに目につくこの頃

自分の田園の生活のたのしみを、そのまゝに、詠み出てゐるが、それが讀む者にいかにも親しい心を起させる。純な心が生活とよく合致してをる。藝術と實生活について考へさせられる。生活の藝術化とはこのやうな事を指していふべきであらう。節もこの意味での『生活派』である。

注意すべきは矢張り生活を彩る自然の風物である。これだけの歌の中に

芋

棕櫚の花

柘榴の赤芽

自然の人長塚節

なるこ百合の花
槲木の花
樫の花
枇杷の實

等の植物があり、松雀、蛙等の動物がゐる。炭がまに火をつけ乍ら柘榴の新芽にさしてくる入り日を見る作者、炭がまの灰をふるひ乍ら竹やぶの中の百合に目をつけてゐる作者、何といふしづかな、又美しい自然と人との交際ではないか。幾度もくりかへすやうであるが、節のやうに、自然を愛し、自然と一つに成りきつてゐる歌人は前にその例がない。

節は又、堆肥の製造に熱心で、いろ〳〵研究した結果、遂に縣の模範堆肥として認められ、又彼の率ゐる青年會は良好の成績を擧げて、遂に郡から表彰されるに至つた。之等のことは後に章をあらためていふであらう。（第一四、村の指導者參照）

四

節の寫生主義は三十七年頃から積極的になつてゐる。自ら意識してこれに努力してゐる。そのことはすでに、「左千夫と節」の章で言つたのであるが、子規の選歌について、左千夫に書き送つた手紙（三十七年八月）の中で

全體、歌人なぞは動植物の智識などあまり無さ過ぎるのだ。少しの心掛けによつて路傍にいくらもやさしい面白い草がある。それを歌に作れば、それは假令上乘の作でないにしても、これまでとは變つたものである。自己の歌の區域が擴大されるのだ。徒に深山大澤を跋渉するには及ばない。自然は吾々にいくらでも手近に面白い動物や植物を分布して置いてくれてある。今後の歌人はこの方面にもつと力を致してよからうと思ふ。

といひ、子規選歌中の品物を動物、植物、裝飾、器物、食物の四題に分類してゐる。その中、動物及び植物を擧ぐれば次の如くである。節の歌に出て來る動植物の智識の豐富なことは皆人の知る通りであるが、それはかゝる心掛に基くものである。

動物

（獸類）熊。狸。馬—駒—赤駒—黒毛の駒。鼠—嫁が君。狐。狼。さを鹿。犬。猫。兎。

ましら。かはほり。

(鳥類) 鶏—初鶏。鶴—蘆田鶴。鴉。鴨。鷺。雉。梟。つぐみ。鳩。鷹。鶉。鵲。雀。燕—岩燕。眼白。カナリヤ。千鳥。鴉。雁。鶺鴒。木兎。頬白。ひぇ鳥。

(蟲類) 五月蠅。桑子—繭。胡蝶。谷蟆。こほろぎ。きりぐす。蟻。龜。蛭。蚯蚓。灯取蟲。

(魚貝類) 鰯。ひしこ。目高。鯉。沙魚。めばる。鰆。金魚。鱸。貝—蛤。海鼠。

(想像の動物) 鬼。土蜘蛛。蒼虬。天狗。龍植物。

植物

(木) 銀杏の花。栗—栗の實。松、松原—門松—玉松—小松—松の葉。竹—刺竹—むら竹—竹の葉—小笹。梅。椿—白椿。檜葉。櫻。鹽釜櫻—楊杞妃櫻—姥櫻—小町櫻—四行櫻—暈染櫻—兒櫻。桃。籃毘尼の林。山茶花。杉。檜林—檜の實。茨。八重の緋桃。梨。錦木。はしばみ。白木綿花。樫。しだれ小櫻。李。樫の木。つゝじ。青柳。楓。牡丹。沈の木。伽羅。鼠柳。桂。いちしば。えびかつら。辛夷。いぬしだの木。楠。

棕櫚の花。總の芽。白樫の落葉。枇杷の落葉。木犀の芽。接骨木。藤。

(草) 麥—麥畑。山慈姑(カタクリ)の花、芝。すゞ菜。(日かげかつら) 稻—藁。菫。萱。白百合。罌粟、(天羅) 萩。芒。雪菜。菊—白菊。藍。菖蒲。金盞。蕗の葉。蓬が杣。蕨。(苔)。葱の青鮮。葉廣菜。淺茅原。芍藥。葦生。あづま菊。蔦。根芹。蠶豆。蓮—白蓮。羊齒。いちご。青菅。芋。蕗。黍の稈。眞菰。瓜。茄子。露草。蒜。夏菊。ねむり草。鳳仙花。

實に驚くべき智識であると思ふ。今の歌人は斯ういふことにかけても怠つてをる。小さいことに、もつとしみ〴〵とした注意を向けなくてはならぬと思ふ。

更に續けて、同じ左千夫への消息に曰く、

僕は植物に就いて智識を得たいと思つて、先輩に問ひ質して色々の草の名を知り、歌を作つたが此間の原稿の歌がそれだ。勿論あれは拙いがこれ迄人が注目しなかつたものを取つてした丈は自ら認めるのだ。句法の變化に乏しいといふやうなことは甘んじてその譏りに服從する。僕はあれだけでは止めない。出來るだけ作つて見る積りだ。新に出來

たうちに

菜の花は咲きのうらべになりしかば莢の膨れを鶸の來て喰ひ

かぶら菜の莢喫む鶸のとびたちに黄色のつばさあらはれのよき

の如きものがあるが、句法その他言ひ顯はし方は別問題にして、かういふものが歌に詠まれた卽ちかういふ平凡なやうな微細なことが歌に詠まれたのは餘り見受けられない樣である。菜の花の末になつて莢を結んだだけならば前例もある、君も詠んだ樣であつたが、鶸が來て喰ふと云ふところは珍らしいだろうと思ふ。又鶸の逃げ去る時に翅を廣げる爲にひら〳〵黄色い色の見えると云ふことも珍らしいではないか。かういふことでやると文字の數多いだけ明瞭に表明し得らるゝので、決して俳句に劣るまいと思ふ。俳句に劣るまいと云ふのはこの題が劣るまいといふのではなくてかういふやり方で成功したならばと云ふことである。人の願みなかつた清楚なる趣味を捉へてやると云ふのが僕の近頃意を注いでゐる所なのだ。かういふものになると堅くるしい詞や飾り詞などは必要を感ずることが薄い。有の儘に表はすのが第一になつてくるのである。それでこれらは

皆實景でなければ駄目である。竹の里人還歌中の作でも眼前の景物を取つて實實に詠んだものはその當時に評判がなくても見飽がしない。三十三年の春雨の作でも君なんぞのは却て人が馬鹿に見た位だつたらうが今日見るといゝのだ。他の人のは餘り漠として緊りがないといつてもよいのに君のは局所を見付けてしかも珍らしい所なのだ。葱の青鉾が立つて居るとか、葉廣菜に白玉おくとか、赤かつた楓の芽がやゝ青くなつたと云ふのであるから讀者の胸中に極めて明瞭に印象される。先生の杯でもさうだ。芍藥の芽といつて更に紅といつてあるのが面白い。先生のは凡てがこんなやり方で當時はつまらぬ樣に思つてゐたが、時のたつに從つて却つてそれが佳くなる。

節がいかに自然への愛に心を深くしてゐたかゞ分るであらう。そして、それによつて、自分の歌境を擴大するに努めたかも分るであらう。「清楚な趣味を捉へてやる」といふ彼の言葉も、「有の儘に現すのが第一だ」といふことも、共に、彼の藝術を味ふ上に、大きな暗示を與へる言葉であると思はれる。節はすでにもいつたと思ふが、歌の上で季節の變化を說いてをる。それはこの植物の研究から來てゐるのである。

五

明治四十年は節が最も多くの秀作を得た年であるが、就中初秋の歌十二首（四十一年一月馬酔木所載）晩秋雑詠十八首（四十一年二月アカネ創刊號）は傑作である。節の特色の最もよくあらはれた歌で、彼の全作中でも最も秀れた作品である。故にこゝにこの全部を掲出する。

初秋の歌

小夜深にさきて散るとふ稗草のひそやかにして秋さりぬらむ

植草ののこぎり草の茂り葉のいやこまやかに渡る秋かも

目にもみえずわたらふ秋は栗の木のなりたる毬のつばらつばらに

秋といへば譬へば繁き松の葉の細く逼く立ちわたるめり

馬追蟲の髭のそよろに來る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし

外に立てば衣うるほふうべしこそ夜空は水の滴たるが如

おしなべて木草に露を置かむとぞ夜空は近く相迫りみゆ

からくして夜の涼しき秋なれば晝はくもるに浮きひそむらし

うみ芋なす長き短きけぢめあれば晝はまさりて未だ暑けむ

芋の葉にこぼるゝ玉のこぼれこぼれ子芋は白く凝りつゝあらむ

青桐は秋かもやどす夜さればさはらさはらと其の葉さやけり

烏瓜の夕さく花は明け來れば秋をすくなみ萎みけるかも

何れも愛唱にたへたる傑作である。題材は例によつて田園の草木や蟲類である。それを通して新秋の夜の清冷がしみ〴〵と緊密に詠ひ出されてをる。稗草も鋸草も馬追蟲も皆生きて動いてをる。芋の葉にこぼるゝ白露を見て、子芋の蕃殖を思ふのはまことに田園詩人の純情であり、烏瓜の白花が夕べにすでに萎んでをるのははかない氣のするものである。作者はそれ等の景と情とをいかにも巧みに捉へてをる。夜氣水の如き新秋の空は、おごそかにして清爽である。恰も之等の歌品の心である。

晩秋の歌も亦いゝ。節獨特の壇場である。

晩秋雜詠、卽興十八首

芋がらを壁に吊せば秋の日のかげり又さしこまやかに射す

秋の日に干すはくさぐさ小鍋干す帚ぐさ干す張物も干す

葉鷄頭に藁おしつけて干す庭は騷ざしくしておもしろきかも

葉鷄頭は籾の筵を折りたたむゆふべゆふべにいやめづらしき

荒繩に南瓜吊れるうつばりをけぶりはこもる雨ふらむとや

はらはらと櫨の實ふきこぼし庭の戸に慌しくも秋の風鳴る

おしなべて折れば短くかがまれる茶の木も秋の花咲きにけり

茨の實の赤びあけびに草白むみぞの岸には稻掛けにけり

黄昏の霧たちこむも秋の田のくらきが方へ鳴鳴きわたる

こほろぎははかなき蟲か柊のはなが散りても驚きぬべし

紅の二十日大根は綿のごとなかむなにして秋行かむとす

先づは以上に止めて置く。讀者はよろしく一首々々について熟讀翫味せられたい。とくにも、初秋の歌と晩秋の歌との間に見る歌の感味の相違に注意せられよ。そこには到底今の、又これまでの歌人の作品に見られなかつたところの氣分の相違がある。この季節の變化に對する感受の敏捷は、節の歌の特色の特色である。

芋がらを壁に吊せば秋の日のかげり又さしこまやかにさす

口誦むと、秋の農家の庭にさす入り日のいろまでが眼にうかぶ。芋がらを壁に吊り干しにした農家もあり〳〵と見える。そして歌の背景をなす詩味は「晩秋」の心持である。

四十一年の「秋雜詠」も秀れてゐる。歌だけを拔いて置く。

葉鶏頭の八尺のあけの燃ゆる時庭の夕べはいや大いなり

ひさ方の天を一樹に仰ぎみる銀杏の實ぬらし秋雨ぞふる

秋雨のいたくしふれば水の上に玉うきみだり見つゝともしも

こほろぎの籠れる穴は雨ふらば落葉の戸もてとざせるらしき

鬼怒川は空をうつせば二ざまに秋の空見つゝ渡りけるかも

鬼怒川を夜ふけてわたす水棹の遠くきこえて秋たけにけり

稻刈りて淋しく晴るゝ秋の野に黄菊はあまた眼をひらきたり

鵯のひゞく樹の間ゆ横さまに見れども青き空の秋よろし

古來秋の歌は多い。併し節の歌の如きすぐれたものはさう多くは無いのである。鬼怒川の夜をわたす渡船の棹の音も、樹上に鳴く鵯の聲も、まことに哀しき秋の情緒である。渡しの舟の音も鳥の聲も、今も、昔にかはりはないであらう。併し今や作者は他界して久しくなる。さうおもふと寂情堪へがたきものがあるのである。

六

節の歌はどこまでも寫生である。寫生の一點張りである。（節の寫生主義に就ては節と左千夫の章參照）併しそれは決して淺膚なる、世に謂ふところの外面的な寫生ではない。その晩年の作に至つては實に象徵の高さにまで到つてをる。その代表的のものとして四十四年、彼が三十三の時の

作「乘鞍岳を憶ふ」をあげたい。四十四年にはこの十四首のみで、他に一首もないが、一年の作歌力をこれに集注した程充實した逸品である。

乘鞍岳を憶ふ

落葉松の谷に鵙鳴く淺間山ゆ見し乘鞍は天にはるかなりき

鵙のこゑ透りてひびく秋の空にとがりて白き乘鞍を見し

おほにして過がば過ぐべき遠山の乘鞍岳をかしこみ我見し

乘鞍と耳に聲響きかへり見て何ぞもいたく胸さわぎせし

乘鞍はさやけく白しにごりたるなべてが空に只一つのみ

自然の人長塚節

おろそかに仰げば低き蒼空をはるかにせむと乘鞍は立てり

乘鞍は一目我が見て一つのみ目にある姿我が目に我見つ

まなかひに佛消たずたふときもの山に乘鞍人にはたありや

乘鞍はひと目見しかばおごそかに年を深めてますます思ほゆ

この一聯は節の自然讃歌であり、山岳禮讃である。「眼交ひに佛消たずたふときもの山に乘鞍人にはたありや」とは正に山岳禮讃である。關東の平野に生れ、そこに育つた作者がはじめて日本アルプスの秀峯を見て、驚歎した。その驚歎の聲が卽ちこの一聯の格律である。吾々も眞に美しい、或は眞に壯美なる自然の前に立つ時、それは恰も偉人傑士の前に初めて立つた時と同じやうな驚きと怖れを感ずるのであるが、節も乘鞍を見て、驚異の眼

をみはつてをる。

乘鞍と耳に聲響きかへり見て何ぞもいたく胸さわぎせし

この『胸さわぎ』は明かに、大自然に對しての驚歎の心である。この驚きの心が卽ち歌に興奮の響を傳へてをることに注意したい。歌として分類すれば叙景歌であるが、自然に對する作者の驚歎（主觀）が乘鞍の大景を捉へ來つて、自己の感懷を直下に吐露し、以て自然に生命を賦與してゐる所、叙景歌にして實は抒情歌である。否な、叙景抒情の區別を絶し、主觀客觀の境界をも撤してをるのである。私はかつて「叙景歌に於ける主觀味」といふことを考察して、或る會での講話としたことがあるが、それは人麿赤人黑人等萬葉の巨匠の天然景象の歌の價値を論じて、節の自然觀に及んだものであつた。

餘談ながら、この歌はアラヽギ第四卷八號子規先生十周年紀念號（四十四年九月一日發行）に掲載せられてゐる。紀念號で子規先生の肖像コロタイプの口繪などを入れ、當時のアラヽギとしては中々立派な特別號であるが、而も尙この乘鞍岳の傑作を一段九首の追込みに組んでをる。齋藤茂吉氏の編輯で、氏自身も短歌小論で、大に氣を吐いてをり、又紀念號だけに伊

藤左千夫、阿部次郎、山宮允、香取秀眞、柿乃村人（島木赤彦）中村憲吉、古泉千樫、森田義郎諸氏の名が並んでをり、私も席末を汚してをる、併し今からみれば何といつても未だ小雜誌であり、（そこに親しみもあるが）節のこの傑作歌などもとり立てて優待もしてをらぬ。併し考へてみれば、これは子規先生十周年紀念號の原稿としては最もふさはしい又意義ある寄稿に違ひなかつた。古い雜誌を見るのも中々面白いものである。

七節の旅の歌

（一）日向遊行歌

一

日本の韻文學は一種の旅行文學であつて、歌も俳句も旅行から得られたものが多い。「奥の細道」などは一篇全體が韻文と見られるが、芭蕉の俳句も彼が旅人としての生活の表現に外ならぬ。西行の歌についても略同じことがいはれやう。其他歌人俳人にして旅を好み旅の歌をつくつてをる人々は少なくない。萬葉集中『羈旅』の歌の多く、又秀れてゐることなぞも這間の消息を傳へるものである。

節には旅行の歌が多い。これは一つは彼が自然を熱愛した性格のためでもあらう。短か

い生涯に拘らず、屢大旅行を試み、その吟詠を多く遺してゐる。南は薩摩の開聞岳、日向の青島に遊び、北は陸奥の十和田、陸前松島金華山に遊び、又佐渡ヶ島へも渡つてゐる。其他北陸山陰近畿南海など頗る廣い範圍に亙つてその足跡を印してゐる。今、その旅行から得た作品の主なるものに就いて概說を試みやうとおもふ。

先づ彼の年譜によつて主なる旅と旅の歌を擧げてみる。

明治三十六年　彼が二十五歳の時

七月より八月に亙り京都奈良伊勢紀伊より三河伊豆に遊ぶ。馬醉木十一月號所載西遊歌六十一首はその收獲である。

明治三十八年　彼が二十七歳の時

八月十八日發程、房州、甲斐、木曾、美濃、近江をへて京都に入り、更に丹波丹後に遊び、攝津伊勢をへて九月十三日歸國

馬醉木十一月號所揭羈旅雜詠百三十六首はその吟詠である。

明治三十九年　二十八歳

八月より九月にかけ約四十日間。松島金華山より出羽最上に出で、大沼の浮島を見、米澤より檜原峠を越えて會津に入り新潟に至り佐渡にわたる。還りて彌彥山に上り、中津川の上流秋山の鄕を探り、信越國境苗場山を越えて上州草津に出づ。

青草集四十三首は常陸平潟の海に行つた時の作である。

明治四十年　二十九歳

陸中平泉より羽後象潟に遊ぶ。

この年はかの早春の歌、初秋の歌の如き傑作のある年であるが、旅の歌はない。

明治四十一年　三十歳

九月上州榛名山を越え草津奥山より切明溫泉にあそぶ。榛名にて濃霧にあひし歌がある

この年馬醉木廢刊

明治四十二年　三十一歳

陸中平泉に再遊し、淺蟲溫泉に行き、又十和田湖に遊ぶ。歌なし。

明治四十四年　三十三歳

傑作「乘鞍岳を憶ふ」十四首があるが、其他に歌なく、旅もない。この年は彼がはじめて岡田博士から喉頭結核との診斷をうけた年である。

旅の歌のみでなく、いつたいに、節はこの頃歌をつくつて居ない。四十一年に暮春の歌、秋雜詠及右にいつた濃霧の歌等の傑作を出してから、ピタリと作歌が止り、四十二年にも四十三年にも歌がない。四十四年と雖も乘鞍岳十四首、たゞそれのみである。おもふにこの時期に於て、節は歌から寫生文に出で、寫生文から小說に熱中してをり、例へば「土」の如き長篇小說に從事してゐたので。おのづから作歌に遠ざかつたのであらう。「土」ばかりではない。「芋掘り」も、「開業醫」も、「おふさ」も、「敎師」も、「隣室の客」も、「太十と其犬」もすべてこの期間に生れた作品である。卽ち右は何れも四十二年、四十三年の勞作である。小說がかくの如く多いに反し歌は一首もない。歌について懷疑的な心境にあつたものと推察せられる。併し歌を生む心は奧底に養はれて湛へてゐた。

その爆發したものが、四十五年の病中雜詠及彼が掉尾の大作「鍼の如く」である。

大正三年　三十六歲

節の大正三年の歌は「鍼の如く」の大作のみで、これが其一から其の五に及ぶ。內容を大別すれば其一は相聞、其二は歸國雜詠、其三其四は病中雜詠、其五は今こゝにいはんとする羈旅の歌並に病中雜詠である。其一から其四及其五の後半までに就ては、節と女性及「鍼の如く」の章に於て、これを略說する。就いて見られんことを望む。

二

「鍼の如く」其五の羈旅の歌は大正三年、節が福岡に病氣療養中、思ひ立つて試みた日向青島の紀行歌である。之より先、大正元年には九州一圓、南海、近畿を旅行してゐる。卽ち開聞岳登山、耶馬溪、別府、道後屋島琴平遊行、高野登山、近江に遊び、京都奈良に遊んでをる。頗る長途の旅であるが、歌は作つてゐないやうである。大正二年には山陰道を旅行してをるが、この時も歌は少ない。

年代は逆であるが、先づ「鍼の如く」其五の日向青島の紀行歌から見やう。

「八月十四日」退院として

あさがほは蔓もて偃へれおもはぬに榊の枝に赤き花一つ

といふのが序歌である。大正三年、彼が死の前年の八月のことである。次いで、「十六日朝博多を立つ。日未だ高きに人吉に下車し林の溫泉といふに宿る」として

手を當てて心もとなき腋草に冷たき汗はにじみ居にけり

腋草は腋の毛であるが、腋草とは面白い言ひ方である。人吉の林溫泉は私もかつて泊つたことがある。明治四十年頃であつたか。その頃は未だ九州鐵道が鹿兒島まで通ぜず、熊本の方面は人吉が終點で、旅人はそこから馬車を賃して矢ヶ嶽を越えねばならなかつた。私も二度あの山越えをした經驗がある。節の行つたのは大正三年であるが、これによると、大正三年にも未だ矢ヶ嶽のトンネルは出來てゐなかつたと見える。

以下順を逐うて歌を抜きつゝ、彼の日向青島行の旅の次第を示す。

十八日、日向の小林より乘合馬車に身をすぼめてまだ夜のうちに宮崎へと志す

草深き垣根にけぶる烏瓜にいさゝか眠き夜は明けにけり

霧島は馬の蹄にたてて行く埃のなかに遠ぞきにけり

十九日宮崎より南の方折生迫といふにいたる。青島目睫の間に横はりてうるはしけれど此の日より驟雨いたりてやがて連日の時化に變りたれば心落ち居る暇もなきに漁村のならはし食料の蓄もなければ

かくしつゝ我は痩せむと茶をかけて硬き飯はむ豈うまからず

酢をかけて咽喉こそばゆき芋殼の乏しき皿に箸つけにけり

東聲曰、咽喉こそばゆきが、喉頭に疾患ある作者だけに利いてゐる。一首句法の老練に注意したい。折生迫といふのは面白い地名である。

二十五日に入りて雨は更に戸をたたくこと劇しくして止むべきけしきなし

痺れたる手枕解きて外をみれば雨打ち亂し潮の霧飛ぶ

土の人長塚節

噛みさ噛み疾風は潮をいぶく處に衣も疊もぬれにけるかも

東聲曰、「痺れたる手枕解きて」など實にうまい。旅に時化に會つて、不安の中に無聊に苦しむさまがよくあられてをる。このあたりの歌と詞書とは橘南谿の東遊記の或るところを思ひ出せるものがある。

二十六日漸くにして晴る。宿は松林のほとりに獨り離れて建てられたるが、道も庭も松葉散りしきてあたりは狼藉たり

木に絡む糸瓜の花もこの朝は萎えてさきぬ痛みたるらむ

二十七日宮崎にのがる。明くれば大淀川のほとりを徜徉ふ。

朝まだきすゞしくわたる橋の上に霧島ひくくしづみたり見ゆ

三十一日内海の港より船に乘りて吹毛井といふところにつく。次の日は朝の程に鵜戸の窟にまうでて、其日ひと日は樓上にいれてやすらふ

手枕に疊のあとのこちたきに幾とせわれは眠りたるらむ

東聲曰、神社の樓上に手枕ごろりと寢たさまは芭蕉などの風雅を思はすに十分である。而もこの作者はきのふまで美れいな、柔かい蒲團の上に寢てゐた作者である。「幾とせわれは眠りたるらむ」の意味を想像するがよい。

倦き身をおこしてやがて呆然として遠く目を放つ

うるはしき鵜戸の入江の懐にかへる舟かも沖に帆は滿つ

東聲曰。何んといふうまさであらう。驚くばかりである。序でながら、この歌の詞書の味の深いことに注意して置きたい。詞書と一首とがよく合致して人と景とをさながらに髣髴する。この呼吸、節の獨壇場である。

渚に近く櫓を掩ひて一樹の松そばだちたるが、枕のほとりいつしか落葉のこぼれたるを見る

松の葉を吹き込むかぜの涼しきに咽びてわれはさめにけらしも

節の旅の歌

土の人長塚節

東聲曰、咽びてわれはさめにけらしも、叙景の寫生ばかりかとおもふと、このやうなアヂをやる作者である。撲吶な田舍漢のやうで、さてうちには美しいもの、あはれなもの、を深く湛へてゐる。印象を攫むことの慧しさは隼鷹の如くである。

九月二日油津の港へつきて更に飫肥に至る、枕流亭にやどる。棚のもと僅に芋をつくりたるあり、心を惹く。

ころぶせば枕にひゞく淺川に芋洗ふ子もが月白くうけり

四日油津の港より乘りて外の浦といふところへわたる。漸くにして探しあてたるはわびしき宿なれども靜かなる入江も見えたれば、もとより戸は立てしめず、闇の際に枕したれば月はまどかにして蚊帳のうちをうかゞふ

蹶越しに雨のしぶきの冷たきに二たび目ざめ明けにけるかも

六日波荒き海上を折生迫の漁村にもどる。この夜思ひつゞくることありてふくるまで眠らず

草に棄てし西瓜の種が隱りなく松蟲きこゆ海の鳴る夜に

九日再び時化になりたればまた宮崎にのがる。人のもとにて梨瓜といふを皿にもりてすゝめらる。此の地方西瓜を產することおびたゞし

瓜むくと幼きときゆせしがごと堅さに割かば尙うまからむ

二十七日に風雨のために宮崎にのがれ、それから鵜戸や油津の方へ行つたのであるが、九日には再びあらしのために宮崎に戻つて來た。節のこの時の旅は殆ど時化攻めに會つてゐる。

これから十三日に再び折生迫の漁村にもどつたが、十四日には豐後へ渡らむと內海港へ向つた。その日の歌

蝕ばみてほゝづき赤き草むらに朝は嗽ひの水すてにけり

傑作である。節の特長がいみじくもあらはれてをる。

三

豐後へ渡るのは大分郊外上野の石佛を見て、それから別府を經て、福岡へかへらむためであつた。石佛を探つて、十八日に節は別府についた。併し石佛の歌はなく、十八日の吟として唯だ一首

こゝろよき刺身の皿の紫蘇の實に秋は俄かに冷えいでにけり

これで節の日向旅行は終る。節はこれから福岡にかへつて又病院生活に入つたのである

が、「鍼の如く」中の旅の歌を解説する私の筆も亦從つてこゝで終るのである。

唯だ一つ。節が宮崎から折生迫に二度目に戻つて來た時の歌を見過ごすことは出來ない。

それは十八日のところに

漸く折生迫にもどれば同人の手紙など屆きてゐたるを一つ一つと披きみてはくりかへしつつ

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のをらぶ夜は憂し

むらぎもの心はもとな遮莫をとめのことは暫しかたらず

の二首である。併しこれについては後に、節と女性の關係を述ぶる章に於て、說明することゝし、今は省略する。

(二)　羈旅雜詠

一

節の旅の歌は、前にも言ふ通り、非常に多い。併し今こゝに述べんとする羈旅雜詠百三十六首は最も大作である。三十八年、彼が二十七の作である。歩いたところは房州、甲斐木曾、美濃、近江、京都、丹波丹後、攝津、伊勢の諸國にして、八月十八日から九月十三

日まで約一ヶ月の旅行である。佳作と思はれるものを少しく鈔してみやう。

八月二十三日雨、房州に航す

相模嶺はこの日はみえず安房の戸や鋸山に雲飛びわたる

東聲曰、第四五の句には人麿の弓月が嶽に雲立ちわたるあたりの影響が見える。

三十一日甲斐の國に入る。幾十個の鑿道を出入して鹽山附近の高原を行くに心境頓に豁然たるを覺ゆ

甲斐の國は青田の吉國桑の國もろこし黍の穂につゞく國

韮崎

走り穂の白き秋田をゆきすぎて釜なし川は見るにはるかなり

韮崎や釜なし川の遙々にいづこぞ不盡の雲深く見えず

宮の越附近

木曾人の秋田のくろに刈る芒かり干すうへに小雨ふりきぬ

東聲曰、旅愁おのづから人にせまるものがある。

西野川の木曾川に合するほとり道漸くたかし。崖下の杉の梢は道路の上に聳えたり

鋒杉の茂枝がひまゆ落合の瀬に嚙む水の碎けちる見つ

馬籠峠を美濃に下る

まさやかにみゆる長山美濃の山青き山遠し峰かさなりて

十二日中仙道伏見驛より川を下らむとして成らず獨り國道を辿る

木曾川のすぎにし舟を追ひがてに松の落葉を踏みつゞぞ來し

木曾川の沿岸をゆく

うろこなす秋の白雲たなびきて犬山の城松の上に見ゆ

東聲曰、斯樣な歌の格式の範をなすものと思はれる。堂々たる本格歌。この邊の數首、何れも深く味ふべきである。

十五日、江崎より大垣

松かげは篠も芒も異草も皆ことごとくまんじゆさげ赤し

節の旅の歌

鯰江の縄手をくれば田のくろの菽のなかにもまんじゆさげ赤し

丁七日潮音蓼圃兩氏と揖斐川の上流に鮎築を見る

揖斐川は鮎の名どころ揖斐人の大梁かけて秋の瀬に待つ

揖斐川の梁落つる水はたぎつ瀬ととゞろに碎け川の瀬に落つ

石山寺途上

鯉とる舟おもしろき勢多川のしづけき水に秋雨ぞふる

粟津

秋雨に粟津野くれば葦の穗に湖靜かなり遠山はみえず

節がこの時の中仙道下りはその旅裝も、その心持も、それはどうしても古俳人などの風雅の行脚を思はせるものであつたらしい。妻籠といふ宿から舊道を辿つた時、溪へ下つて襯衣を洗ひ、日頃の垢を流す。又巨嚴の蓬を求めて莫蘆しきて打ち臥す。一つは秋天の高きを仰ぎ、一つは衣の乾く程を待つなりといふやうな歌の詞書に徵しても、その次第は解せらるゝ。莫蘆を被り、菅笠をもつて山の大木のかげに休んでをる節の寫眞を見たことがあるがこの時の撮影であつたかも知れない。非常に難儀な旅をしてをるのである。

京都では法然院、白河村、一乘寺村なぞへ行き、又石川丈山の詩仙堂の跡をたづねた。伏見桃山へも行つてをる。併し愚庵和尚の蹟を訪ふた時の歌がおもしろい。

二

その歌は三首ある。

梧桐の庭ゆく水の流れ去る垣も朽ちねばいますかとおもふ

巨椋の池のつつみも遠山も淀曳く船も見ゆるこの庵

桃山の萱は葺きけむこの庵を秋雨漏らば誰か掩はむ

詞書に「愚庵和尚の遺蹟を訪ふ。庵室の椽の高きは遠望に佳ならむがためなり。戸は鎖

したれど時久しからねば垣も未だあらたなり。清泉大石のもとを流る」とある。序にいふ。愚庵は俗名天田五郎、盤城平藩の勘定奉行甘田平太夫の子であつたが、戊辰の大亂に城陷り、彼は身を以て諸所に轉戰した。戰をさまつて家に還つたが、兩親や妹が行方不明になつてゐた。其後臺灣征討の軍に從つたり、事に觸れて獄に下つたり、いろ〳〵な艱難をなめたが、遂に父母の在所を知らんとして遍く全國を行脚した。その間に山岡鐵舟の紹介で清水次郎長の食客になつたこともある。明治十八年頃、大阪で新聞記者をしてゐたが、そのうち京都へ上つて、當時の高僧滴水禪師の下に禪に入り、明治二十年四月薙髪して鐵眼と稱した。愚庵はその號である。其時三十四歳であつた。子規と交際があつて、子規が柿を貰つた禮に柿の歌を送つたといふのは卽ちこの鐵眼和尙のことである。書も歌も秀れたものである。歌も、明治の萬葉調短歌を知るには必ず注意すべき一人である。故に序を以てこゝに一言して置く。尙愚庵を知るには文求堂發行「愚庵遺稿」がよく、相馬御風氏の「愚庵和尙その他」、齋藤茂吉氏の短歌私鈔等も愚庵を知る上に參考になるよい文獻である。

三

舞鶴から船にて宮津へ向つた。

眞白帆のはらに泛ける與謝の海や天の橋立ゆほびかに見ゆ

橋立にて

橋立の松原くれば朝汐に篠葉釣るひと腰なづみ釣る

こゝにして堅さに見ゆる橋立の松原通ふ人遠みかも

松原を長洲の磯とさし出の天のはしだて海も朗らに

二十四日由良の港を立つ

由良川は霧飛びわたるあかときの山の峽より霧飛びわたる

節の旅の歌

土の人長塚節

曉の霧はあやしも秋の田の穂ぬれに飛ばず河の瀬に飛ぶ

ずつと飛んで、須磨明石に來る。

舞子濱

落葉掻く松の木の間を立ちいでて淡路は近き秋の海かも

明石、人丸神社

淡路のや松尾が崎に白帆捲く船あきらかに松の間にみゆ

明石にやどる

明石潟あみ引くうへに天の川淡路になびき雲の穂に沒る

引返して京都にあそぶ

廿七日南禪寺附近

葉雞頭もあかき垣内のそしろ田に引板の繩ひくその水車

大原

粽卷く笹のひろ葉を大原のふりにし鄕は秋の日に干す

寂光院途上

鴨路草の花のみだれに押しつけてあまたも干せる山の眞柴か

寂光院

あさなさな佛のために伐りにけむ紫苑は淋し花なしにして

更に近江に入る。湖畔吟。

堅田浮御堂

さゝ波のさやさや來よる葦村の花にもつかぬ夕蜻蛉かも

志賀の舊都

さゝ波の滋賀の縣の葱作り龕朶垣つくるあらき龕朶垣

澁柿の腐れて落つる青芝も畑も秋田もむかし志賀の宮

此舊都の蹟は洵に形勝の地なり、以て天智天皇の剛邁果敢の主なりしを想見すべし

いにしへの近江縣は湖潤く稻の秀國うつそみもよき

節の旅の歌

うつゆふのさき國大和すみ棄ててうべ知らしけむ志賀の宮どころ

滋賀つのや秋田もゆたに湖隔つ田上山はあやにうはぐはし

柿本人麿の近江荒都に至りて詠める歌と奈何。讀者がめい〳〵に比較鑑賞するも亦一興であらう。それから嵯峨に福田靜處先生を訪ね、附近の勝をさぐり、彦根、伊勢を經て、伊良胡ケ崎にあそび、四日市から汽船で横濱に歸つた。下總の家にかへつたのは十月十三日であつた。

家にかへりて作あり

めづらしき蝦夷の唐茄子蔓ながらとらずとぞおきし母の我がため

たうなすはひろ葉もむなし雜草(あらくさ)の蚊帳釣草も末枯にして

この二首、一篇を結び得て甚だ妙、節が家にかへつた歌はいつよんでもうれしい。とくにも、母を思つた作品がなつかしい。乳兒が母の懐に抱かれてゐるやうな、心安さと美しさがある。

(三) 濃霧の歌

節は明治四十一年九月上州松井田村から村の間を通つて榛名山を越えた。榛名湖に至る間で、濃霧に逢つて霧の歌の傑作を得てゐる。どのあたりか、はつきり判らぬが、相馬ケ嶽と榛名富士との間の高原であるらしい。伊香保から山越しに行つても、景色のよい道である。一篇十五首、今これを全部掲載する。

濃霧の歌

群山の尾ぬれに秀でし相馬嶽ゆいつ湧きいでし天つ霧かも

ゆゝしくも見ゆる霧かもさかさまた相馬ケ嶽ゆゆり下ろしきぬ

節の旅の歌

土の人長塚節

はろばろにほへる秋の草原を波の偃(は)ふごと霧せまり來も

ひさかたの天つ狭霧を吐き落とす相馬ケ嶽はおそろしくみゆ

おもしろき天つ霧かもつかの間に山の尾ぬれを大和田にせり

秋草のにほへる野邊をみなそこと天つ狭霧は下りしづめたり

榛原は天つ狭霧の奥を深みわたつみそこに我はかづけり

うべしこそ海とも海とたゝへ來る天つ狭霧には今日あひにけり

うつそ身を掩ひしづもる霧の中に何の鳥ぞも聲たてゝ鳴く

しましくも狭霧なる間は遠長き世にあるごとくおもほゆるかも

久方の天のしづきり下りしかば心もうとし遠ぞけるごと

常にみる草といへども霧乍ら眼に入るものは皆めづらしき

榛原の狭霧は雨にあらなくに衣はいたくぬれにけるかも

おぼほしく掩へる霧のあやしかもわがあたりべは明らかに見ゆ

相馬嶺はおのれ吐きしかば天つ霧降り居へだたり再びも見ず

この一篇の連作は乘鞍岳を憶ふ作と共に節の二傑作であり、明治大正の歌壇の傑作である。私はかつて、『現代名歌選』の中で、この歌を評して、

天然を詠んだ歌として、雄渾壯大斯くの如きものを私は知らない。作者と天然とが、冥々裡に相抱いて、作者の内部に躍る鬱勃たる生氣がおのづからこの歌のリズムを成してをる。そして歌の格調は勁く、殆どはち切れる程に緊張してある。言葉と語法とのもつ韻律の作者の内部衝動と合致したのでなければ能くかくの如くなることは出來ない。人麿の傑作「足引の山川の瀬のなるなべに弓月が嶽に雲立ちわたる」等の壘を摩さんとするものである。

といつたが、この評言は十年前と今と少しもかはりはない。年を經るに從つて、彼の藝術の深みが一層よく分つて來る。

彼の歌は斯樣な自然の歌でも、主觀の色につよく塗りつぶされて、獨自の一個の世界を成し、それが、人の心につよく働きかけて來る。つよい主觀によつて詩としての生命が賦與せられてをるからである。こゝに至れば主觀も客觀も、叙事も叙情もない。渾然として一個の生命の世界である。象徴といふことの意義は容易に說き難いが、斯樣な作品を指して象徴の高さに達してをるといつてもよいであらう。茂吉の所謂自然自己一元の生を寫すといふのも斯かる境地であらう。左千夫はこの歌を評して

境涯の隔世的なるに詞句皆超脫の響あり、人をして一讀現實を忘れしむ

といつたさうだが、適評である。

尙、この歌は形式からいへば連作である。私は一部の人の反對にも拘らず、連作の用ふべきことを信じ、之を試みてをるが、この歌などは自分の信念を愈固くするいゝ材料である。多力者があつて、霧の歌の絕唱を一首よんだとしても、節のこの連作のやうな、深い味は出て來ない。これは十五首一篇、各首が各首を援けて作品の價値を益大ならしめてをるものである。而も一首々々は決してその短歌としての獨自性を失つてをらぬ。

八一つの旅信

一

環境は人の心を支配する。新しい環境を容易につくること旅に如くものはない。旅にいづれば人の心は直ちに常とは著しく異つた空氣に包まれる。旅はわびしいが、併し佗びしい間に放たれたる歡びもあれば新しい境界での親しさも味はれる。この自由と寂しさと歡びは制作の動因となる。

芭蕉の「奥の細道」の中に

のみしらみ馬の尿する枕もと

といふ句がある。陸前から出羽にいでんとした彼が鳴子の湯を過ぎ尿前(しとまへ)の關を越えた後、或山中で風雨にあひ、汚ない農家に逗留した時の作である。蚤、しらみに攻められ、どう

しても眠られない。わびしい一夜を明かしかねてゐると、枕許の馬小屋で馬の小便する音がするといふ實景の句で、いかにも汚穢なる山中の旅寢であるが、これは當時の旅としては左もありさうなことである。奥州では今も住居の一部を仕切つて馬小屋に充てゝある。この間私は陸奥の鮫の海岸へ行つた時、そんな家の作りを二度も三度も見た。

それは、とにかく、この芭蕉の一句も單に文字だけの意義ではさして面白くもないが、所謂奥の細道を背景として之を見、更に彼の旅する心持にも立ち入つて見れば、中々深い味を有つた句である。この句のみではない。芭蕉の一生とこの制作の殆どすべては、この苦くしも寂しい句行脚の心の底から泉のやうに湧いたものである。旅は芭蕉に取つては必然なる心の要求であつた。彼の句はこゝに根ざしてゐる。私は先月宮城縣下の農村へ行き、序に、平泉の中尊寺をたづねたが、例の芭蕉の

夏草やつはものどもが夢の跡

さみだれの降りのこしてや光堂

などの句の意味や、芭蕉の心持や、更に彼がこの中尊寺の古蹟を見るために、一關を越え

て遙々とこゝまでやつて來た思慕の心を追想して、今更のやうに奥の細道に於ける旅人芭蕉の相を思ひ出したのであつた。恐らく彼は自分の境涯に徹せんとして、旅を求め、藝術を遂ひ求めたであらう。

二

節の旅行好きは上述の如く、又頗る難儀な旅を好んで行つてをることも上述の如くである。三十八年の中仙道の旅の如きはその最も甚しきものであらう。それはすでに「羈旅雜詠」中で説いた。が、私は今又、茲に高崎商業學校教諭丹羽泰藏氏から、所謂一蓑一笠式の彼の旅を思はせるに十分なる手紙を借りてをる。丹羽氏は節と同鄕の人で、村上鬼城門下の俳人である。

手紙は明治四十一年八月二十三日附で、上州入山村花敷溫泉から茨城縣下妻町なる丹羽氏に送つたものである。四十一年といふ年は、節の作歌がしばらく杜絶えるに至つた終りの年で、これから大正元年病中雜詠を出すまでは、四十四年に乘鞍岳を憶ふ歌があるのみで、四十二年にも四十三年にも作歌がないのである。併し四十一年には約四十首の作があり、就中、榛名山を越えて濃霧にあつた時の歌、即ち濃霧の歌十五首があるので注目される。之等はすでに註した。年譜によると榛名越は九月とあるから、上州入山村から丹羽氏へ手紙を送つたのはその前であらうか。前記の如く該手紙の日附が八月二十三日となつてをるからさうらしく考へられる。先づ丹羽氏への手紙を見やう。平假名と片假名との交ざり、文語と口語とまざつた、無雜作な山中の旅信である。丹羽氏の寫してくれたそのままを左に載せる。

三

此手紙ヲカクベク小生ハ疲レ居リ候。ソレハ溫泉ニ屢々ハヒツタノト昨夜蚤ニ攻メラレ且ツ溪流ノヒゞキガ喧シクテ眠ラレナカツタコトヽデアル。入山村ハ上野國ノ最モ奥ノ奥デアル。草津ハ前橋カラ十八里、輕井澤カラ十一二里、長野カラ十四里皆峠ガアル。其草津ノ奥ガ入山デアル。此溫泉ハ只一軒家デ溪流ノ落チ合フ瀨ニ臨ンデ居ル。花敷（ハナシキ）トイ

フ名ハ誰ガツケタカソレダケハ振ッテ居ル。入山トイウテモ字ガ八ツアル。此處ガ其中央ダ。今朝山ヲ越シテ一里アル長平トイフ人ノ名ノヤウナ字ヘ行ッテ漸ク案内者ヲ頼ンダ。案内者名ヲ覺藏トイフ。三十代ノ小氣味ノイヽ程ガツシリシタ男ダ。穢イコト夥シイ家デ軒ニ蝮蛇ガ二串サシテアル。毛皮ノ沓ガ五足バカリ吊シテアル。彼ハ冬ニ毛物ヲ追ヒアルキ、暑イ時ハ山ノ奥ノ奥ノ溪流デ魚ヲ釣ルノガ業デアル。明日越エヨウトイフ大倉峠(ダイクラ)ハ三國峠ト長野カラ草津ヘ通フ澁トイフ七里アル峠トノ中間デ旅客ノ曾テ越エタコトノナイ所デアル。入山ノ人間デサヘイクラモ知ッタモノハナイ。大倉マデハ魚釣ガ行クノデ道ガアル相ダガソレカラ先ハ笹ヤ草デ道ノ形ハナイ相ダ。此所モ曾テハ牛ノ背デ米ヲ運ンダコトモアルノダトイフガソレハ廿餘年ノ昔ノコト、國境ノ査定官ガ二三年前踏破シタキリ人ハ通ハヌ。ソレデ明日モ一日ニハ行ケヌノデ覺藏ノ小屋ヘ一晩寢ナケレバナラヌ。彼ハ一週間位ヅッ小屋ニ泊ッテ居テ魚ヲ釣ッテハ草津ノ温泉場ヘ六七里モ持チ出シテ賣ルノデアル。雨デモ風デモ彼等ノ厭フ所デハナイ。今他ノ一人ガ魚釣ニ行ッテ居ル相デアル。此邊ノ人ハウヲトイハズニイヲトイッテ居ル。ソレデ米ヲ背負ッテ行ケバ副食物ノ魚ハスグニ釣ルトイフノデアルカラ稍面白カラウト思フ。覺藏ト寢ル山上ノ一夜ハドンナデアルカ此ハマダ語ルワケニ行カヌ。昨日暮坂峠ヲ下リテカラ三人ノ繭買ト同行シテ入山ヘハヒッタ。熊食ノ爺サントテ顔ヲ熊ニムシラレテ二目ト見ラレヌヒドイ姿ノ爺サンガ魚釣デアッタガ入山ノ奥デ凍死シタナドイフ話ヲ聞イタ、覺藏モ面白イ話ガアルコトヽ思フ、手紙ハコレマデヾアル。

大兄には今年もはや御目にかゝることを得申すまじと存候に付右申上候いづれ面白き事實に遭遇せば文章を綴り可申候

八月廿三日　　節

丹羽様

蝮蛇を串にさして軒に吊してある案内者の覺藏の家といふのはおもしろい。熊に顔を引ッ掻かれ二目と見られぬ姿になつてゐる熊喰ひの爺さんと共に白井喬二の小説に出て來さうである。何しろ數里先きは人跡未踏の山奥で、二三年前査定官が一度踏破したきり、人

の通はぬところだといふのである。山の人は魚を釣つて食ひ、芋を掘つて食ふ、まるで上古の民である。熊に顔を引ッ掻かれるなどは吾々には想像さへ出來ぬ。花敷温泉といへば名は美麗だが、この山奥の一軒の温泉である。節は、この手紙で、明日一日では行けぬので覺藏の小屋に一夜泊まらなくてはならぬといつてゐる。難澁おもふべしであるが、こんなにまでして、彼は山を探り谿を求めて旅行したのである。覺藏の小屋に寢たその夜の節の心境は、芭蕉が尿前の山中の農家に泊つて、蚤しらみの句をよんだ心持と同じではあるまいか。

年譜には九月（四十一年）榛名山を越え、草津の奥山より切明温泉に遊ぶとあるが、この切明温泉は矢張り草津の奥であるが、前記花敷温泉よりは更に山奥にあるらしい。八月三十一日附で切明温泉から平福百穂氏にあてた手紙がある。

ともかく、節はよく旅をしてゐる。これは彼が自由なからだであり、家がゆたかであつたことなぞも原因するであらうが、併し根本の動機は自然と藝術に對する愛のためである。そして注意すべきことは彼が好んで苦しい旅行をしてゐることである。その一例にもと思つて今この一つの旅信をかりて掲げるのである。

今の人は旅行をしても贅澤で上等の宿に泊り、汽車も二等で、多くは急行である。便利ではあるが、却て歌や詩の心には遠い。今の人の旅の藝術に『旅の心』がにじみいでて居らぬのは、苦しい旅をしないためである。藝術家に旅はよい。けれども、それは苦しい旅でなくてはならぬ。

九 病氣と作品

一

節の病氣は喉頭結核であつたが、明かにそれを知つたのは明治四十四年（三十三歳）である。即ち、その年七月頃から咽喉に痛みを感じたが、少時は打ち棄て置いた。十一月上京して岡田和一郎博士の診察をうけると喉頭結核と診斷せられたのである。

驚き、悲みて、節は十二首の病の歌を作つてをる。四十五年二月のアラヽギに「わが病」といふ題で發表せられたものが即ちそれである。

わ が 病

喉頭結核といふ恐しき病ひにかゝりしに知らでありければ心にも止めざりしを打棄ておかば餘命わづかに一年を保つに過ぎざるべしといへばさすがに心はいたくうち驚かれて

生きも死にも天のまにまにと平らけく思ひたりしは常の時なりき

わが命惜しと悲しといはまくを恥ぢて思ひしはみな昔なり

往きかひのしけき街の人皆を冬木のごともさびしらにみつ

わが心萎えてあれや街行く人の一人も病めりとも見ず

知らなくてありなむものを一夜ゆゑ心は今はきのふにも似ず

かくのみに心はいたく思へれや目さめてみれば汗あえにけり

しかといはゞ母歎かむと思ひつゝたゞいひやりぬ母に知るべく

なにしかも命悲しといはまくに答ふることは吾は知らぬに

なうれひそと人はいへどもまたけくてあらばかあらむ我愁ひざれや

人は我ははかなきものかひたすらに悲しといふもわが爲にのみ

病院の一室に年を迎へて

わが命としほぎ草のさち草の日蔭の蔓長くとをのる

衰ふるわが顏さびしこゝにだにあけに映えよとあけの紙貼る

この歌長塚節歌集には病中雜詠(一)として載せてある。病院の一室に年を迎へて、とあるは岡田博士の根岸養生院のことである。四十四年の歳末に入院して、四十五年(大正元年)の正月を病室で迎へたのである。併し二月二十二日にその病院を退院し、一先づ下谷の那須館に落ち着いたが三月七日歸鄕し、その月の十六日に出發し、京都大學へ行つて診察をうけ、大學病院へ入院した。然るにこの病院も四月にはもう退院し吉野へ遊びなどしてゐたが、月の下旬には夏目漱石氏の紹介で福岡へ行つて久保猪之吉博士の診察をうけた。ところが、この頃は未だそれ程病氣がひどくなかつたものか、久保博士の診察をうけた後で鹿兒島方面へ旅行し、開聞嶽に上り、五月には宇土から長崎へ渡り、福岡に歸つて、再び久保博士の診察をうけた。併し未だ入院せず、諸國に遊んで保養してゐる。「土」が出版せられたのはこの頃である。

二

京都大學の病院にゐる頃に病中雜詠(二)が出來て、それをアラヽギへ發表した。即ちアラヽギ第五卷第四號に載つてをる一篇の連作がこれである。これは後年の「鍼の如く」に亞ぐ傑作であるから、重復するかも知れないが、煩をいとはずこゝに全部を掲出する。因みに節には明治四十五年には右にいつたわが病十二首とこの病中雜詠の一篇の連作があるのみである。この二つの外には一首の歌もない。これは當時彼が歌について可成强い懷

疑的な考へに陷つてゐた爲であつて、それは彼の書簡などにもあらはれてゐるのである。

○

病中雜詠　二

明治四十四年十二月廿四日、ふと出でありくことありて此の日ばかり夜に入りて病室に歸り來れば、むすびし儘に派手なる袱紗のつつみ一つ電燈のもとにおかれたり。怪みて解きみれば我が爲に心づくしの品は出できたるに、赤きインキもて書かれし手紙も添へられつ四たびまで立ち入りがてに病院の門を行きすぎてけふ始めておとづれきといふに思ひ設けぬ事なれば待たんやうもなく、今は悔ゆれども及ばずなりぬ。されどわれ生れて三十三年はじめて婦人の情味を解したるを覺えぬ、我は感謝の念に堪へず、其人一たびは我と手を携ふべかりつるに惡性の病生じたれば我に引き止めむ力もなく、斯くて離れたるものゝ合ふべき機會は永久に失れて果てぬ。其夜はふくるまで思の限り長き手紙に筆取りて、生涯の願ひいま一たびおとづれ給ひてんやと書きつけるを、夜もすがら思は擾亂れて明くれば痛き頭を抑へつゝ庭の寒き梢に目を放ちやりて

四十雀なにさはいそぐここにある松が枝にはしばしだに居よ

東聲曰、この歌の詞書は作者と女性との關係を示し、彼の內面考察をなすに方つて缺くべからざる資料である。

包袱の地はつゆ草の花のいろなるを、人は鬼怒川の水上に我とおなじ西岸に棲めれば、想を故郷の秋に馳するに、なよなよとせるつゆ草の馬の蹴七たび過ぐれども根は絕えずなど

偶言に聞きけることもいまはなかなかに懷しく

鬼怒川の篠に交れる鴨跖草は刈る人なしに老ゆといはずやも

鬼怒川の岸のつゆ草打ち浸りささやくことは我はきけども

つゆ草の花を思へばうなかぶし我には見えし其の人思ほゆ

からまるを否とたれか言ふ鴨跖草の蔓だに絡め我はさびしる

土の人長塚節

病みてあればともしきものかつゆ草は馬がはめども枯れなくといふに

鴨跖草の種はあまたもこぼれども我には生へずなににかはせむ

既に五十日にも餘りぬれば我病院生活も半を過ぎたらむと思ふに、待つ人の遂に來られば徒らにおもひを焦すに過ぎず、醫術の限を竭して後は病はいかに成り行くべきかと心もこゝろもとなくて、一月廿三日の夜いたく更くる程に筆とりて、

我が病癒えなばうれし癒えて去なばいづへの方にあが人を待たむ

あまたたび空しき門は過ぎきとふ人はかへしぬ我が思止まず

ここにして來なば來なむと待つ人のここにも來ねばいつとてか見む

霜ばしら庭に立てれば石踏みて來とさへいひてやりける人を

いたづらに思ひたのめて人待つと氷は閉ぢて解けにけらずや

さきはひを人は復た獲よさもあらばあれ我が泣く心拭ひあへなくに

おほよそは心は嘗ていはなくに思ひ堪へねばいひにけるかも

又庭にある山茶花のあはれに咲きのこれるに僅に懷をやるとて

打ち萎えわれにも似たる山茶花の凍れる花は見る人もなし

山茶花のわびしき花よ人われも生きの限りは思ひ嘆かむ

山茶花は萎えていまは薄れども命なる間は豈散らめやも

倚さまゝくに思ひつゞけて

我を思ふ母をおもへばいづべにかはぐくもるべき人さへ思ほゆ

我病めば母は歎きぬ我が母のなげきは人にありこすなゆめ

おもかげに母おもひ見れば人遂に母たりなむと思ひ悲しむ

我が母の肉のゆるびは嘆き故あを思ふゆゑにわれすべもなし

一月廿六日の彼の袱紗ゆくりなく手にとることありしに絲卷の型の染め抜かれたるが今更に目に映れば

とこしへに解かむすべなし孛環のあまたはあれど手にもとれねば

をだまきといへばそゞろに懐しき故郷の庭なる糠斗菜のうへにも及びぬれば

あまたゝび冬には逢へど枯れざりし庭の糠斗菜かれなくてあれな

此の日、ひれもす雨ふるに何事にも母のおもひ出でられて、

我にさへこのふる雨のわびしきにいかにかいます母は一人して

いささかのゆがめる障子引き立ててなに見ておはす母が目に見ゆ

張り換へむ障子もはらず來にければくらくぞあらむ母は目よわきに

ここにしてすすびし障子懐へれば母よと我は喚ぶべくなりぬ

糠斗菜を母と二人が見てし日は障子はいまだ白かりしかど

三月七日、暫が程と故郷にかへる。三日ばかりして歸りこんと出で行きて既に四月にもなりたれば、あたりはさながら忘れ去りたるやうなるを一日々々とある程に

ゆくりなく拗切りてみつる蠶豆の青臭くして懐しきかも

蠶豆はまだ短くして、たとへば土地に落ちたる生石灰の石のやうなるが、おのづから水分を含みてほとびつゝあるが如し。我もこれより遠く西國の旅に赴かむとすれば

そら豆の柱のごとき莖たたばいづべに我は人おもひ居らむ

三月十三日　朝のほど雨ふる

外に立てどいくだもぬれぬ春雨を椶櫚の葉に聞く外に立ちしかば

雨はやがて雪にかはりたれば寒さ身にしむに母と相對して火鉢に手をかざす

桑の根の炭はいぶせし火を吹くと皮がはねつる吹かなくてあらむ

遠人を思ひ、母をおもふ。幽思うたゝ哀切にして人の胸を撲たずんばやまぬ。思ひ遣る心にたへないものがあるではないか。

凡その人皆さうであるが、この作者の母思ひも亦人をして涙を拭はしむるものがある。後にいはんとする「鍼の如く」と相俟つて、この病中詠は抒情歌のもつとも本質的なものであらねばならぬ。節の自然の諷詠の秀拔なるは何人も知る。併し斯種の幽情哀吟に至つては、遂に、これに追隨し得る一人をも見出すことが出來ないのである。

尙、右の歌の最後の部分の一首にある詞書の、我れ亦遠く西國に云々とあるは、四十五年二月に根岸養生院を退院して一先づ歸鄉し、三月中旬名古屋、月ヶ瀨、笠置を經て京都大學に行きし時のことを指すものである。

三

病氣や天災や貧困や、藝術家には古來不幸な人が多い。併し不思議なことには、藝術家にありては往々その不幸が不幸でなくして、却つて彼に幸ひする。不幸に會つて彼は却つて生長するからである。昔から偉大な藝術家は何れも苦しんでをる。或者は殆ど堪へ難い苦患に幾度も幾度も出會つてゐる。併し彼は苦しみつゝ生長をつゞける。ドストイエフスキーに於ても、ストリンドベルヒに於ても、苦患は却つて彼等の幸福であつた。

病氣もやはりそれである。私は正岡子規歌集に於て子規のことを論じた末に、次のやうにいつた。

――由來、病氣は人を偉くする。これは人の精神を外部に遮斷して、內部に集注せしむ

るためである。内へ内へと心を進ましむるためである。これを明治の文壇について見るも樗牛、獨歩、梁川、漱石等皆病氣に苦しめられ、それに堪へて深くなつた人々である。長塚節や石川啄木も亦さうである。若くて死んだ人々の間には無數にその例がある。ただ意力の足りないものは生長を見ぬうちに挫け倒れてしまふ。子規の偉大も亦彼の病生活による精神力の集注に外ならないと思ふ。病氣と藝術には深い深い關係がある。

これは子規についての言であるが、この短かい文中にも名をあげてある如くに、節の偉大も病氣に負ふところが大であらうと思ふ。大器は病氣によつて屢悲慘なる生活を送るが、又反對に悲慘なる生活を送ることによつて大器はます〳〵大成し、小器も亦次第に大成の機緣を與へらるゝ。肺病の一つもできないやうな奴に秀れた作品は出來ッこない、これはたしか生田長江氏の例の皮肉であつたと記憶するが、併しこの言葉には笑つて過ごせない眞實がこもつてゐる。

節を論じて病氣のことを看過することの出來ない所以である。

一〇　鍼の如く抄

一

「鍼の如く」は、節晩年の約一ヶ年間の療病歌日記である。大正三年五月よりアラ、ギに掲載せられ、翌年一月に及び、合計二百三十二首の大作である。卽ち

鍼の如く其一　四十七首
　九州旅行歌及神田橋田病院入院中の相聞及雜詠。「節と女性」の章參照
鍼の如く其二　四十首
　橋田病院入院中の雜詠のつゞき。歸省中の雜詠
鍼の如く其三　三十六首
　大正三年夏久保博士の診療をうけんとして福岡に行きし時の歌、入院中の歌
鍼の如く抄

土の人長塚節

鍼の如く其四　三十九首

病院雜詠

鍼の如く其五　七十首

八月退院して日向青島に遊ぶ。別府を經て再び福岡にかへる。其間の歌。又福岡にかへりて後の病中雜詠

以上である。

「鍼の如く」といふ題意は、歌の極致は上手な鍼醫が銀の鍼を打つ如くであらねばならぬとの平生の主張から來てゐる。節は歌の上で、屢「冴え」といふことをいつたが、その心は右の鍼醫が銀の鍼を打つといふ心に通ふものである。節は又、人間は鐵の棒で擲つても死ぬし、小さな鍼を打つても死ぬ。短歌の妙は鍼の如くであらねばならぬとも、人に語つてゐた。この心にも通ふものがある。

白銀の鍼打つごときぎりぎりす幾夜はへなば涼しかるらむ

といふ歌もあれば、又小說「白瓜と青瓜」の中には

すると恰も上手な鍼醫が銀の鍼を打つやうに、耳の底に浸み透る馬追の聲が、庄次の這入つてをる蚊帳にとまつて鳴きました……

などの句もある。「鍼の如く」は即ち彼の制作信條たる「冴え」を象徵していふ言葉である。

「鍼の如く」の二百三十二首は、節の傑作にして、明治大正歌壇の傑作である。これがアラヽギに連載せられた頃、私は青山南町の假寓に病んでゐたが、之を讀んで異常の感動をうけた。當時の私は今日とは異なり、歌壇には門外漢であつたが、その門外漢の私をして驚異の眼を睜らしめた。一つは私が病苦と闘つてゐた際であつたためでもあらう。私は自分の驚きを訪れてくれる友人などにも語り、偶アラヽギで長塚節追悼號を出すといふので私も腹這ひになつて「櫟の詩人を憶ふ」といふ一文を書き、その中で『鍼の如く』を一言推賞して置いたのである。

今日でこそ、「鍼の如く」は節の傑作であり、且つ明治大正歌壇の傑作であると極めを付けられてをるが、當時は極めて一部の具眼者の外その價値を知らなかつたやうである。その證據には、これほどの大作が數ヶ月に亙つてアラヽギに連載せらるゝに拘らず誰一人と

して批評を書くものが無かつたのである。偶批評するものがあれば、それは三井甲之氏の如き今のアラヽギとは傳統的に仲のよくない人で、從つて「鍼の如く」を評してセンチメンタリズムの作とする如き妄評であつた。三井氏が「人生と表現」誌上で「鍼の如く」を評して享樂主義の歌であり、センチメンタリズムの作であるといつたのである。

併し私は、當時のことはよく記憶せぬが、唯だあの青山の墓地に近い、暗い家の病室でアラヽギを讀んでゐて、「鍼の如く」を讀み、殆ど直感的にその價値を知つた。或る部分は涙を流して繰り返し繰り返し讀んだ。あの家にゐたころの事は私にいろ〳〵の記憶となつて今も甘い、又悲しい思ひ出となつてゐるが、その一にこの節の歌のあることを私はうれしく思ふ。私はたつた一枚節の短册を所持してゐるが、それはその頃近所であつた齋藤茂吉氏に貰つたものである。齋藤氏は折々私をたづねて脈を診てくれた。「鍼の如く」などについて語つた記憶もあり、短册も恐らくそんな時に貰つたのであらう。餘談であるが、「鍼の如く」について語るにあたり、これだけのことを記して置きたい。

二

「鍼の如く」は右述の如く、其一から其五に及んでをる。そのうち、其一其二の前半までは殆ど神田の橋田病院に入院中詠んだ哀しい相聞である。これについては、後に「節と女性」の章で述べるつもりである。故にこゝには、其二の後半、即ち節が退院して郷里下總に歸つた時の雜詠から始めることゝする。

大正三年五月三十日橋田病院を退院して、歸省中につくつた歌は、二十八首ある。例の如く、村の自然を歌へるものが多いが、それは「自然の人長塚節」の章で述べた通りである。母との間を歌つたものに、哀しい韻のものが多い。主なる歌を拔かう。

○

病院の一室にこもりける程は心に惱むことおほくいできてまなこの窪むばかりなればいまは只よそに紛らさむことを求むる外にせん術もなく、五月三十日といふに雨いたく降りてわびしかりけれどもおして歸郷す。

鍼の如く抄

土の人長塚節

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども
小さなる蚊帳こそよけれしめやかに雨を聽きつつやがて眠らむ

三十一日、こよひもはやくいねて

なきかはす二つの蛙ひとつ止みひとつまた止みぬ我も眠くなりぬ
短夜の淺きがほどになく蛙ちからなくしてやみにけらしも

夜半月冴えて杉の梢にあり

小夜更けて厠に立てばものうけに蛙は遠し水足りぬらむ

六月一日、あたりのもの凡ていまさらに目にめづらしければ出でありく

麥刈ればうね間うね間に打ちならび菽は生ひたり皆かがまりて

幼きものゝ仕業なるべし

垣根なるうつ木の花は扱き集めてぞろりと土に棄てられにけり

東聲曰。この歌の「ぞろりと土に」、又前の歌の「菽は生ひたり皆かゞまりて」の結句「皆かゞまりて」などは、寫生の妙を遺憾なく發揮せる名句である。

夕近くして雨意多し

雨蛙しきりに鳴きて遠方の茂りほの白く咽びたり見ゆ
いさゝかは花まだ見ゆる山吹の雨を含みて茂らひにけり

やがてしげく降りいづ

つくづくと夏の綠はこゝろよき杉をみ上げて雨の脚ながし
泥のぬかり足駄の齒にわびしけれど心ゆくばかりのながめせんとまたいでありく
鉈豆のものしくも擡げたるふた葉ひらきて雨はふりつぐ

鉞の如く抄

土の人長塚節

車前草(おほばこ)は畑の小みちに槍立てて雨のふる日は行きがてぬかも

雨をよろこぶこころを

蕗の葉の雨をよろしみ立ちぬれて聽かなともへど身をいたはりぬ

三

門の畑には苺の熟する六月であつた。母は節をよろこばさむと朝々その苺畑に立つた。

わが草苺を好むこと度を知らずとも言ひつべし。未だ甚しく體力の衰ざりし程は一度に五合に上らざれば胸の爽かなるをおぼえず而も日には幾度となく之をくり返して飽くこともなかりき。さるを今年は家を離れて久しくなりけるに市場にいでたるはかつて手にだも觸れむとせざれば日頃はさびしくあかしけるが、今はうれしきは門の畑なり。

たらちねは笊もていゆく草いちご赤きををつむがおもしろきとて

幾度か雨にもいでて苺つむ母がおよびは爪紅をせり

草苺洗ひもてれば紅解(べに)けて皿の底には水溜りけり

五日(六月)微雨、人に會ふことなくて來にたれば車に幌かけて出づ。鬼怒川をわたるみやこ草さらさを染めし草むしろかそかに濡れて霧雨ぞふる

口をもて霧吹くよりもこまかなる雨に蘭の花は濡れけり

鬼怒川の土手の小草にまじりたる木賊(とくさ)の上に雨はれむとす

四日晴れて俄かに暑し。風引くことの恐しくてためらひけるを今は中々に心も落ち居たれば單衣になる

取り入れて肌につめたきたまゆらは單衣のころもつくづくとうれし

くつろぐと足を外に向けころぶせば裾より涼したゞそよそよと

蚊の如く抄

さやけども麥藁帽子とばぬほど南風吹きて外はすがすがし

暑き頃になればいつとても痩せ行くが常ながら今年はまして胸のあたり骨あらはなれど單衣の袂風にふくらみてけふは身の衰へをおぼえず、かゝること幾許も得續くべきにあらざれど尙ひとり心に快からずしもあらず。

單衣きて心ほがらかになりにけり夏は必らずわれ死なざらむ

今年はまして胸のあたり骨あらはなれど……と節はいつてをる。寫眞などで知つてをる彼の顏を見る氣がする。この病骨を抱いて、故郷の山にかへり來つた彼の吟詠が卽ち右に略擧げつくした鉞の如くの其二の後半の歌である。

節はかくて又ぞろ國を出で、福岡大學病院に入院すべく九州に向ふのである。「六月九日夜下關にての二首」を以て鉞の如く其三ははじまる。

四

國を出てから四日目に博多についた。

しばらく旅館にゐて、長旅の疲れをやすめつゝ、朝は福岡市外なる千代の松原などを散歩する。

夏帽の堅きが鍔に落ちふれて松葉は散りぬこのしづけさに

十二日

蚊帳の中に瞼とぢてこやれども蚊にさされ居し足もすべなく

蚊のさしゝ足を足もてさすりつゝあらぬことなど思ひつゞけし

十四日

脫ぎすてて臀のあたりがふくだみしちゞみの單衣ひとり疊みぬ

東醫曰、「足を足もてさすりつゝ」「臀のあたりがふくだみし」は、さすがに寫生の力である。

此夜いまさらに旅の疲れいできにけるかと覺えられてちまたには蚤とり粉など賣りありく淺夜を早く蚊帳吊らせけり

鉞の如く抄

低く吊る蜘のつり手の二隅は我がつりかへぬよひよひ毎に

東聲曰、蚕とり粉を捉へたところにこの人の季節の感受と旅愁とがあらはれて面白い。このあたりの數首深く味ふべし。

病院は病室がみな塞がつてゐて入院出來ない。節は仕方なく、町の旅館に泊つて病院通ひをしてゐた。

久保博士の心づくしも暫くは空しくて雨にぬれて通ふ

すみやけく人も癒えよと待つときに夾竹桃は綻びにけり

二十日漸くいぶせき旅宿をいでて病院の一室に入る。二日三日の程にくさ〳〵聞き知りて

馴れ行く、病院の規模大なれば白衣の看護婦おびたゞしく行き通ふ、皆かひがひしく立ち

働くところ服裝の爲なればか年齢の相違の如きも俄に分ち難くすべて男性的に化せられたるが如く見ゆれども

たまたまは紺のひとへ帶締めてをとめなりけるつゝましさあはれ

廿四日夜、また不眠に陷る

いづべゆか雨洩りたゆく聞え來てふけしく夜は沈みけるかも

小松植ゑたる狹き庭を隔だてて外科の病棟あり、痛し痛しと呻く聲きこゆ

夜もすがら訴へ泣く聲還ぞきて明けづきぬらし雨衰へぬ

廿五日ベコニヤの花一枝を挿し換ふ。博士の手折りたるなり。白き一輪挿は同夫人のこれもベコニヤの赤きを活けてもてきてくれたるなり。廿六日の朝看護婦、蚊帳をはづしていけるあとにおもはぬ花一つ散り居たり

悉く絶りて垂れしベコニヤは散りての花もうつぶしにけり

ちるべくも見えなき花のベコニヤは蝸の裾などふりにけらしも

寢臺の下のくらきを拂ふこともなく、看護婦の宵毎に釣りければ蚊帳の中に蚊多くなりて

この夜もうつら〳〵としてありける程更けゆくまゝに一しきり襲ひきたれるに驚く。

ひそやかに螫さむと止る蚊を打てば手の痺れ居る暫くは安し

鍼の如く抄

聲かけて耳のあたりにとまる蚊を血を吸ふ故に打ち殺しけり

七月一日朝まだきにはじめて草履はきておりたつ。構内に梢ひろき松林あり近く海をのぞむ。

月見草萎まぬほどと蛙鳴くころゐをたづねて松の木の間を

柵の外には畑ありて南瓜つくることおほし、我酷だこの花を愛す

たゞひとり南瓜畑の花みつゝこゝろなく我は鼻ほりて居つ

前後に人もなければ心も潤き松の林に白き浴衣きたりけることの故はなくして嘘矜りかにうれしく

朝まだきまだ水つかぬ浴衣だに涼しきおもひ松の間を行く

たゞ一つ松の木の間に白きものわれを涼しと膝抱き居り

ころぶしてみれば梢は遠かなり松かさが動くその雀等は

松かけの蚊帳釣草にころぶしていさゝか痒き足のばしけり

かくのごと顔すりつけてうなづけば蚊帳釣草も懐しきかも

窓外

ほぷらあと夾竹桃とならびけり甍を越えてほぷらあは高く

四日深更、月すさまじく冴えたり

硝子戸を透して蝸に月さしぬあはれといひて起きてみにけり

小夜ふけて窮に蚊帳をさす月をねむれる人は皆知らざらむ

さやさやに蝸のそよげばゆるやかに月の光はゆれて涼しも

目さめてさま〳〵のことをおもふ

かゝるとき扁蒲畑に立ちなばとおもひても見つ今は外に出でず

鉞の如く抄

七　日

よひよひに必ずゆがむ白蚊帳に心落ちゐて眠るこのごろ

白蚊帳に夾竹桃をおもひ寄せ只こゝろよくその夜ねむりき

厭はしきは蚊帳の中の蚊なり

はかなくもよひよひ毎に蚊のをらぬ蚊なれかしとおもひ乞ひのむ

以上で「鍼の如く」其三入院中の歌は終る。殆んど全部を抄出したのであるが、讀者はこれによつて、節の病院生活の有樣を窺知するを得ると共に、又その歌の清爽のうちに高きいらべと悲しき心のこもれるを看取するであらう。歌人や詩人には身體の弱い人が古來多く、從つて病氣の吟詠は其數が非常に多い。けれども節の之等の作は古來の病床歌詠中最も秀れたものである。

五

病中雜詠の歌日配は未だつゞく。卽ち「鍼の如く」其四がこれである。今しばらく拔萃するであらう。

七月十七日構内の松林を逍遙す。煤煙のためなればか、梢のいたく枯燥せるが如きを見る

油蟬乏しく松に鳴くころも暑きがゆゑに嗄れにけらしも

いづれの病棟にもみな看護婦どもの其詰所といふものの窓の北陰にささやかなる箱庭の如きをつくりてくさ〴〵の草の花など植ゑおけるが、夕毎に三四人づつおりたちて砂なれば爪こまかなる熊手もて掃き清めなどす、十九日のことなり。

水打てば青鬼灯の袋にもしたたりぬらむたそがれにけり

東聲曰。まことに傑作であるとおもふ。尤もとくにこの作にのみ限つたといふではないが——。

かゝる時女どもなればみな〳〵さゞめきあへるが、ひとり我がために撫子の手折りたるを

鍼の如く抄

土の人長塚節

くれたれば
牛の乳をのみてほしたる墨ならで挿すものもなき撫子の花
この女すべてのものゝ中に野にあるなでしこを第一に好めるよしいひければ
なでしこの交れる草は悉くやさしからむとわがおもひみし
墨に活けたるまゝにして
なでしこの花はみながらさきかへて幾日へぬらむ水減りにけり
撫子は今にはかなき花なれど捨つと言にいへばいたましきかも
二十日の夜ひとつには暑さたへがたくして夜もすがら眠らず、明方にいたりて蛙の聲を聞く
快くめざめて聽けと鳴く蛙ねられぬ夜のあけにのみきく

さわやかに鳴くなる蛙たとふれば豆を戸板に轉ばすがごと
朝のうち必ず一しきりはげしく咳出づることありて苦しむ
曉の水にひたりて鳴く蛙すずしからむとおもひ汗拭く
以上で「鍼の如く」其四の一を終る。更に歌の日記はつゞく。
蚊帳釣草を折りて
暑き日はこちたき草をいとほしみ蚊帳釣草をいけてみにけり
こゝろよく汗の肌へにすゞ吹けば蚊帳釣草の髭そよぎけり
少しく飛んで、
二十三日(七月)久保博士の令妹より一莖の桔梗をおくらる。枕のほとり俄に蘇生せるが如し。
さゝやけきかぞの白紙爪折りて桔梗の花は包まれにけり
鍼の如く抄

土の人長塚節

桔梗の花ゆゑ紙はぬれにけり冷たき水のしたゝれるごと

桶などに活けてありける桔梗をもたせりしかば紙はぬれけむ

目をつぶりてみれば秋既に近し
白埴の瓶に桔梗を活けしかば冴えたる秋はすでにふふめり

しらはにの瓶にさやけき水吸ひて桔梗の花はひきしまりみゆ

桔梗を活けたる水を換へまくは肌は涼しき曉にしあるらし

我は氷を嚙むことを好まざれど
暑き日は氷を口にふくみつゝ桔梗は生けて見るべかるらし

氷入れしつめたき水に汗拭きて桔梗の花を涼しとぞみし

すべもなく汗は衣を透せどもききやうの花はみるにすがしき

おもふに節は秋草が好きであつたであらう。特にも桔梗のやうな、清々しい花が好きであつたであらう。私はこの人の性格からしてそんな想像をする。そしてこの場合は、その好きな花を博士の令妹である若い女の人から貰つたのであるから、その心づくしもしのばれて、一層うれしく思つたに違ひない。その愛しい、うれしい心がこの數首の桔梗の歌の上に躍つてをると思はれる。又左樣な、ロマンチックな背景を考へずとも、「桔梗の花はひきしまりみゆ」の如き表現は、寫生の上乘であつて、いかにもよく桔梗の姿を寫してをるとおもふのである。節には草花の歌は非常に多いが、桔梗の歌は、その中でも秀れてゐる。

朝顔の歌もある。

朝顔の赤は萎まずむき捨てし瓜の皮など乾く夕日に

あさがほの藍のうすきが唯一つ縋りてさびし小雨さへふり

朝顔の垣根にたてばひそやかに睫毛にほそき雨かゝりけり

かつかつも土を偃ひたる朝顔のさきぬといへば只白ばかり

又きりぎりすの歌もある。

石炭の屑捨つる道の草むらに秋はまだきのきりぎりす鳴く

きりぎりすかまくしばし臀据ゑて暮れきとばかり草もぬくめり

きりぎりすきこゆる夜の月見草おほつかなくも只ほのかなり

白銀(しろがね)の鍼打つごときぎりぎりす幾夜はへなば涼しかるらむ

大學の病院にゐても節は、桔梗をうたひ、朝顔をうたひ、蛙をよみ、きりぎりすをよむ。やつぱり「土」の歌人である。蟲と草との詩人である。この最後の「白銀の鍼打つごとき」の句が、はじめに言つた如く、この一篇二百六十幾首の大連作の標題のつけられた出所である。固よりこの一首のみではないが、節は短歌や俳句の如き小藝術の理想を鍼醫が銀の鍼を打つことにたとへ、「冴え」といふことを論じてゐたのである。

病氣がやゝ輕快に赴いた爲でもあつたか、節は八月十四日に退院した。退院して南九州及東九州の旅行に上つた。その旅行吟が卽ち「鍼の如く」其五の前半である。これは節の旅行の歌についてすでに說明を試みた所である。

六

鍼の如く抄

『鍼の如く』の結尾の養痾雜詠は、彼が日向の旅から福岡へ戻つて、病院へ通ふ間の歌である。大正三年八月二十二日以後の作。

二十二日、博多なる千代の松原にもどり又日毎に病院に通ふ。

このごろは淺蜊淺蜊とよぶ聲もすゞしく朝の嗽ひせりけり

三十日雨つめたし。百穗氏の秋海棠を描きたる葉書とりいだしてみる。庭にはじめて咲けりとあり。

うなだれし秋海棠にふる雨はいたくは降らず只白くあれな

いさゝかは肌はひゆとも單衣きて秋海棠はみるべかるらし

十月一日庭のあさがほけさは一つも花をつけず

朝顏の垣はむなしき秋雨をわびつゝけふもまたいねてあらむ

病院の門を入りて懐しきは只雞頭の花のみなり

雞頭は冷たき秋の日にはえていよいよ赤く冴えにけるかも

日ごろは熱たかければ日れもす蒲團引き被りてのみ苦しみける程にもとより入浴することもなかりけるが、たま〳〵十八日の朝まだき、まだ咲くやらむと朝顏のあはれに小さくふふみたる裏戸をあけていで行く。

浴みして手拭冷ゆる朝寒みまだつぼみなりそのあさがほは

吸入室の窓のもとに、一坪ばかりの庭の砂掘きよせて苗を挿してありけるが、夏の日にも枯れず、秋もたけて漸く一尺餘りになりたればいまは日ごとに目につくやうになりけるを十一月十一日折から時雨の寒掘きくもりて曇がしきに

はらはらと松葉吹きこぼす狹庭には皆白菊の花さきにけり

十四日、夜にいりて雨やまされど俄に思つ立つことありて久保博士をおとなふ

しめやかに雨の淺夜を籠ながら山茶花のはなこぼれ居にけり

俄かに九度近く上りたる熱さむることもなく三十日ばかりの間は只ひきこもりてありければ常に季節に疎しともおもはざりける身の山茶花の花をみることはじめてなれば今更のごとく

とく驚かれぬるに

吸物にいさゝか泛けし柚子の皮の黄に染みたるも久しかりけり

幾時ならむ、目ざめて雨のはげしき音をきく

松の葉はまたこぼるらし小夜ふけて廂に雨の當るをきけば

東聲曰、絶唱。前の歌の詞書に、常に季節に疎しとも思はざる身の、云々とあり、節の季節の研究についてはすでに一言した。

○

歌はまだあるが、さのみはと思ふゆゑ、この邊でやめて置く。その後熱が下つて人を訪問するやうになり、或時は太宰府迄も出掛けてをる。

併し彼の病氣は一向に恢復の方に向はず、却つて次第に悪しくなるのみであつた。さうして年末急に悪化し、年の明けるをまちかねて、入院するに至つたが、これが彼の最後であつた。二月七日夜昏睡狀態に陷り八日午前十時に死去したのである。

その時のことは別に「死の前後」のうちに述べやう。

一一　細心と眞面目

一

節は實に注意深い人であつた。いやしくもしない人であつた。細かいことにもよく氣のつく人であつた。それについて節と生前親しかつた福島縣瀬上町の人門間春雄君が、かつて私に次のやうな話をした。門間君はアラヽギ派の歌人であつたが、今は故人である。

長塚さんを訪問しやうと思つて、その旨を通ずると恐ろしく細かい注意書きの返事が來る。汽車の時間も、下車してからの道順も詳しく書き、地圖まで書添へてある。行つて泊つてをる間にも色々細かいことに氣を配つてくれる。例へば菓子一つ出すにもこの菓子はどの菓子器に入れ、どの箸を添へて出すといふ風に、家のものにやかましく言ひつける。風呂が沸いても自分が湯加減を見てからでなくては客に勸めない。冬なぞ、女

中が床をのべれば自分が行つて行火の工合を見る。行火にかけた蒲團の裾がよく暖まるやうに手を入れて見るのである。愈辭去しやうとすると俥を雇つて呉れ、車夫の面前で車賃を貰はぬこと、汽車の時間に遲れぬこと、遲れさうになつた時は途中から綱曳を雇ふことなぞ、やかましく言ひつけるのである云々。

實に行き屆いた注意振である。車夫に俥賃を貰はぬ樣にとの注意は誰もする。私なぞにもこれ位は出來る。菓子器の選擇もむづかしいことではない。併しみづから湯殿へ下りて湯加減を見たり、行火のかけ蒲團に手を入れて、その暖さ加減を見るといふ如きは、容易に出來る譯のものでない。一から十まで女中の手をかりるブルジョアの子弟には夢想だに及ばぬ所であらう。實に綿密で、細心で、根氣がつよい。門間君が恐ろしく細かい注意書の返事をくれたといふその返事を見るに、曰く

偖て御いで被下とならば停車場は小山驛より水戸線へ乘換、下館驛にて下車南方下妻町へ四里、更に二里にして小生の居村に候。下妻町より一里にして鬼怒川の沿岸に出で、暫く土手を傳うて若宮戸より皆葉に渡り半里に遠からず候。下館より下妻までは乘合馬車有之候へ共、貴君には人力車の方便利に候べきか。馬車ならば三十錢、人力車ならば六十錢乃至六十五錢、それ以上申す時はお叱り相成候て可然候。下妻より人力車に乘換へてお出に相成候こと何れにしても一番宜しく候。二里の道なれど渡船場からが時としては非常の惡路故或は四十五錢か五十錢位のこと申出づべく候。何にしても上野驛は隨分早くお立に相成らずては日のあるうちに小生方へは六かしく候。青森線の七時二十五分ならば九時四十六分に小山着、十時四十六分小山發十一時二十分下館驛着、此處にて一寸晝食せねば途中には何物もなしと思召さるべくそれも停車場前の旅館なぞへお立寄相成候ては面倒故少しはやくても小山驛にて辨當など求め下館まで車中三十分以上の時間有之候へば其間にお濟し相成ること至極と存じ申候。輕便の旅行を主とする小生は斯樣の手段を取り申候へども此は千金の子に語るべからず貴君に對しては失禮かも知れ不申候へ共一寸書添申候。人力車にて通しに小生方へお出成候も亦一方法に有之候（中略）小生の居村は東京を距る十七八里なれどもまだ汽車見ぬ人間さへ有之候程にて凡ての不便は申すまでもなく、折角の御光來にも第一に差上可申食料にも事缺き申候。其邊は豫

め御承知被下度、茶は些少の用意も候へども暫く上京不致ため茶菓の用意は皆無に有之候。小生の家族はいつも唯の三人にて父は萬事に干與せぬ人とて内外一切のこと母が一人にて負擔致居候樣の次第に候へば世上の主婦の如き品よく優しく相構へ居候ことは小生の母には絶對に望み難く婦人としての微細の點に於ては缺けたる處も多く來客のあしらひなども年來の懇意は宜しく候へどもたま〳〵お出の方には思はぬ方に失禮の點も發見致され可申候云々

この手紙はまだ非常に長文であるが、先づ以上でやめて置く。いかにも門間君のいふ通り恐ろしく細かい返事である。汽車の時間、道順は普通のことであるが、車賃を知らせるは親切であり、晝食を車中でせよ、決して驛前の旅館などに入るな、などと注意するに至つては、細かいとも何んとも言ひ樣がない氣がする。よくも斯んなにまで長い手紙が書けたものだとただ〳〵驚くの外はない。

「土」のやうな、綿密で、長い小説の書けるのも、やはり斯うした彼の根氣からである。

二

中岫つや子さんといふ女の人に時々手紙を送つてゐるが、この中に又細心な節の面目躍如たるものがある。つや子さんといふのは節の親類で、下妻町の醫者の娘である。

その一

其後は御無沙汰致しましたが如何御暮しでございますか。私はどうも思はしくなくて困つて居ますが、それでも幾十日以前から出てとれない熱が昨日から急に低く成りました。どうかこれが本當に下がつてくれゝばいゝと願つて居ます。昨年あなたのお宅に不幸のあつた頃から私は八度からの熱が出たのです。今思ふとあの時は出て歩いちや惡かつたのでした。(略)

あなたは學校でお習ひになつたことをよくおぼえておいでゞすか。忘れてはいけませんよくおぼえて居た處で今すぐに役に立つのぢありませんが、あなたがお母樣になつて、それから十年も經つた時に大變役に立ちます。私は方々の家を歩いてつく〳〵さう

思ひます。あなたが習つたことを本當に覺えてゐたら立派な女なのですよ。これは私が本氣でいふのですからさう思つてきいて下さい。あなたはうつかりしてゐては不可ません。來年はいくつですか。思へばあなたのお宅にも近來不運つゞきの樣ですが、あなたのお母樣も定めてお力落しのことゝ存じます。私も承知して居ながら熱が高かつたりすると遂ひ無精になつてすみません。どうも何處の家でも間の惡い時は仕方がありません。あなたもしつかりしてお母樣のために覺悟なさい。何でも急いぢや駄目ですよ。惡い時には餘計ぢつと辛棒して居なけれや成りません。いつまでも惡いことばかりはありません。私の弟も出征します。

大正三年（亡くなる前の年）十月一日福岡市外平野旅館から繪葉書に書いて出した手紙である。「習つたことを本當に覺えてをれば立派な女ですよ」といひ、「惡い時には餘計ぢつと辛棒して居なけれやなりません」などいふ所に、如何にも節らしい行屆いた心が窺れるのである。併し重要なのは次の二つの手紙である。

その二

此間は御手紙をありがたう。一寸したことですが、間違がありますから申上ます。御手紙には私の御弟子が出征したといふやうにありますが、私のやうな無學な人間にはお弟子などいふものは一人もありません。私には軍人に成つてをる整四郎といふ弟がありまして。それが今度出征したので、私の弟もと繪葉書へ書いた積りです。弟子と弟とでは大變な違ひです。若し弟とかいたのを弟子と讀んだならあなたは女としてもつと注意する習慣をつけねばなりません。私は弟と書けばわかると思つたのです。又私が本當に弟子と書いたものなら何といふ粗忽な人間だらうかと只恥入る外はありません。どちらにしてもいゝことではないのですからあの葉書を出してみて下さい。（下略）

その三

（前略）

それから弟子と書いたのは弟御（おとうとご）の間違ひだといふことですが、これも一寸したことで大事ですから申します。他人の舍弟に對して弟御などといふのは相手が自分より眼下の場合に限ります。だから上へ御の字を附けて見ても足りません。なぜさういふ時に下へ樣

といふ字をつけることを知らないのです。それにしたところで、あなたのやうに私よりも、私の弟よりも、年下の人からは非常に拙づい言ひ樣のやうに思はれます。それではどういつたらいゝかは能く考へたり、人にきいたりして御寛なさい。それも立派な學問になります。

引續いて福岡からつや子さんに送つた手紙である。弟のことを弟御（おとうと）といふつもりで弟子と書いたのを注意した文面である。いかにも、目上の者の舍弟を弟御といふのは妥當でない。併し若い女にこれ位の間違は有勝ちであらう。今の女學生にはもつと〳〵非度い間違ひが幾らも有るかも知れぬ。これを斯く責めるやうにいふは節の生帳面な性格のためである。この女性を思ふ心から、きびしく言つてをるのである。

節はなほ續けていふ——

どうもだん〳〵小言のやうでいけませんが。私はあなたが少しも隱さないで間違つたことをそッくりとつて貰つたことが非常にいゝと思ひます。それは誰との間柄でも無暗に隱さないといふことは必要なのです。尤もものには度合ひといふものがありますから打明けていゝ事と惡いこととはありますが、自分に内密の惡いことがない時は心が晴ればれしてゐますから人に不快の感を與へません。どうかさういふ風にして下さい。家庭を作つても必ず和合して行きます。

自分に祕密の惡いことがない時は心が晴ればれしてゐるから人に不快の感を與へない、かくすれば家庭も和合して行く——と訓へる。而も節は獨身であつた。獨身でゐて、斯樣な世の中の辛酸をなめつくした程の親切な言葉を與へて、彼女を教訓してをるのである。こゝらにも節の人間があり〳〵と見える。

三

中岫つや子さんに宛てた手紙を今一つ掲げる。

御手紙拜見しました。私はまだ九度ばかり熱が出ました。二日で引きましたが、又入院さしてもらふ積りでゐます。

あなたのお手紙前回のもよく出來てゐるけれども、どうも物の言ひ方が、同輩も目上も

目下も區別がなくて困ります。何よりも第一に、念を入れた御愛想がいけないのです。學校出の人はみんなこんなぢやないかとも思ひますが、これは書いたら紙一枚要ると思ひますから、唯今の身體では仕方がありません。お目にかゝつた時に申上げます。唯だ學校から出たばかりの十九や二十の娘にはどんなにしたつて、本當の歌は出來ないのですから、他人に對して、私は歌をよみますとか、歌が出來なくて困りますなど言つてはいけませんよ。非常な勉强して出來ないなら、出來ないもきこえるが、勉强もしないものが出來ないなどといふのは、心ある人に笑はれますよ。私も歌をよみ出してからもう十九年の終りになりました。正岡先生についてからでも十六七年になります。一時はひどく勉强したこともありますが、それでも決して出來さうにもしません。此間のアラヽギのなどろくなものぢやないのです。世間に歌よむといふ人なら幾ら有るか知れやしません。併し私の望むのは、本當の藝術としてゞあります。私にはその立派な藝術品でなければゆるせないのです。むづかしいでせう。大正三年十二月夜、頭が痛い、福岡より。

やはり中岫つや子さんに宛てた手紙であるが、短かいこの手紙の中にも節の面目、とくにも、藝術としての短歌に對する態度がよくあらはれてゐる。勉强もしないで、歌が出來ないなどといふは生意氣で、物笑ひだから、そんな事をいつてはいけないと、注意するあたり、實に面白い。私には藝術としての立派な歌でなくてはゆるせない、とあるあたりも節の作歌態度の眞劍さが見えて興味がある。節は實に斯樣な態度で歌をよんだ。一首の歌と雖も、遊びや道樂の心からよんだのではないのである。

實際、節のいましめる如く、世間に歌をつくる人は多い。青年歌人といふやうな人のいかに多きかは一册の雜誌をみても解る。併し眞に藝術として、之に對する人は極めて少ない。私共もこの間の消息はよく知つてをる。

それにしても、節の如き、立派な人を親戚にもつてゐたこの中岫さんのやうな女のひとは幸福だとおもふ。幾ら學校に行つても、さう〳〵細かい所まで氣をつけて教へてくれる先生はゐない。親や兄弟は親切であつても日常は馴れて忘れてゐる。叔父さんなどのうちに、節のやうな人を持つて生れた人は、とくにも若い女のひとなどは仕合せだとおもふ。中岫さんは今どんな生活をしてゐるか、私は知らないが、恐らくはよき家庭の人となつて

幸福に暮してゐることであらう。萬一不幸にして何等かの事情のために、現在の生活が幸福でないとしても、生涯のうちに節のやうな人から斯樣な手紙を貰つたことは、神に感謝すべき幸福であると思ふ。

四

節の綿密で細かいことにまで注意の行き屆く人であつたことは、之等の諸例で十分にわかることゝおもふが、手紙の中から、今一つの例を引かう。それはやはり福岡から郷里の母堂にあてた手紙である。

（前略）

此間送り被下候分は拂渡局を只福岡縣博多と致しありし爲東公園局にて受取ること叶はず、やはり以前の市の中央局なる福岡局へ參り昨日受取り申候。誠に不便にて困り候。博多東公園局は大學の門前故それへあてゝと二度も詳しく申上候ことにて、前回も其通りにして御送金被下候に今回はもう間違ひ申候。宗道局振出故誰か使の者にて用を辨じ候事と存じ候が、それはいつもの如く只口上にて御遣はし相成候ことには無之候や。何も知らぬ者には口上だけにては記憶むづかしく、遂には博多のみを申候結果にあらずやと存じ候。それならば例の母上樣の御病にて、私在宅中も、一筆書いてやらねば分らぬ事を面倒にして、只口上のみにて使を遣はし候こと始終のことに候が、あれは使の者の迷惑何程とも分り申さず、用を言ひつくる者には何事も分り候へども、言ひつけられる者には分り不申候。若し今回の間違がそれからとすれば餘程御注意被下度、一家の疲弊するには幾多の原因も有之候へども、如此ことも小に似て大事に有之候。又間違がそれならずとすれば、二回までも詳しく申上候ものをお忘れに相成候とは如何にも物事が疎末に相成居り候ことゝ申す外無之候。些細の事ながら念の爲申上候。筆にて書いてやりしものを郵便局が間違ふ理由は無之候。

郵便爲替の拂渡局の指定を間違へたことについて母を責めてゐる。二度も注意したのにまだ間違へるとはあんまりぞんざいです、といつて責めてゐる。

下女や小者を使にだす時は口上ではいけない。必ず用向きを書きつけて下され。それを

面倒がる故間違を生ずるのだといふ節の言葉は面白い。これは私共の經驗にもあることである。會社などで給仕を使ひにやる。課長や上役は人によると尊大にかまへて詳しく說明してやらぬ。新米の給仕などは聞き返して叱られることを恐れ、用向を十分に呑み込みもしないで出掛けて行く。そして用を辨じないで歸つて來る。或は間違つて、戻つてくる。そんな事は私が會社に勤めてゐる時も屢々あつた。つまりはじめに用事を言ひつける時、親切を缺いだためである。

節が

用をいひつける者には何事もわかり候へども、言ひつけられる者には分り申さず候

といつてをるのは、實に、至言である。立場を代へて用をいひつけられる者の心を少し察して、思ひ遣る心があるならば、間違ひは生じない。これは家庭にも工場にも會社の勤めにも、常に、當て嵌まるべきことである。上に立つ者にはこの思ひ遣りの心が欲しいものである。

續けて節は

一家の疲弊するには幾多の原因も有之候へども、如此ことも小に似て大事に有之候

といつてをるのは、さすがに苦勞してをる人の言葉である。病院からの手紙で、一家繁昌の基ともなるべき世渡りの道を說いて、母に注意してをるのである。

麥の蒔遲れを母に責めて、私には涙の出る程情無く候といひ、百姓するものが何故にかく年々のことが解らぬものに候や、といつてをるのは、右に引用した手紙の後半である。これについてはすでに述べたから、玆には省略する。

兎に角、節は眞面目な、實に几帳面な人であつた。用意周到とはかくの如きをいふのであらう。銀行や會社の會計係にすれば、節は、極めて適任者であらうと思はれる。百姓しても、會社員になつても、つまりは同じことである。節のやうな、注意深い性質は何を爲るにも必要である。

歌などをつくる人には亂次(だらし)のない人が多い。亂次なきことを以て歌人の特權であるかの如くに考へてゐる人さへある。併しそれは大なる間違ひである。亂次(だらし)ない人の作は歌も亦亂次がない。屢々聞く言葉であるが、私は人間がヤクザですから、せめて歌だけはいゝ歌

を作りたいと思ひます、などといふ。とんでもない間違である。ヤクザな人間からいゝ歌が生れる筈はない。

節の藝術が秀れてゐるのは節の人格が秀れてゐるためである。人格を離れて、藝術のみが存在するとおもふのは大なる間違である。

一二節と女性

一

節は生涯獨身であつた。三十七年の生涯は必ずしも短くないが、その間、遂に妻を娶らなかつたのである。從つて節には妻子の歌はない。又生來眞面目であつた節には女性についての艶ッぽい話はあまり聞かない。

寫眞などを見ると節は中々好男子である。その上田舍はどこでも男女の間はルーズである。されば節についても村の女との艶ッぽい話が有りさうなものであるが、事實は反對である。併し京都で舞妓をつれて祇園の夜櫻を見にゆく程の風流心を持つてゐた節である。生涯節が童貞であつたとは信じられない。「隣室の客」には「私」といふ或る青年が女中を犯すことを書いてある。この「私」が節であると直ちに斷言出來ないにしても、或は斯うい